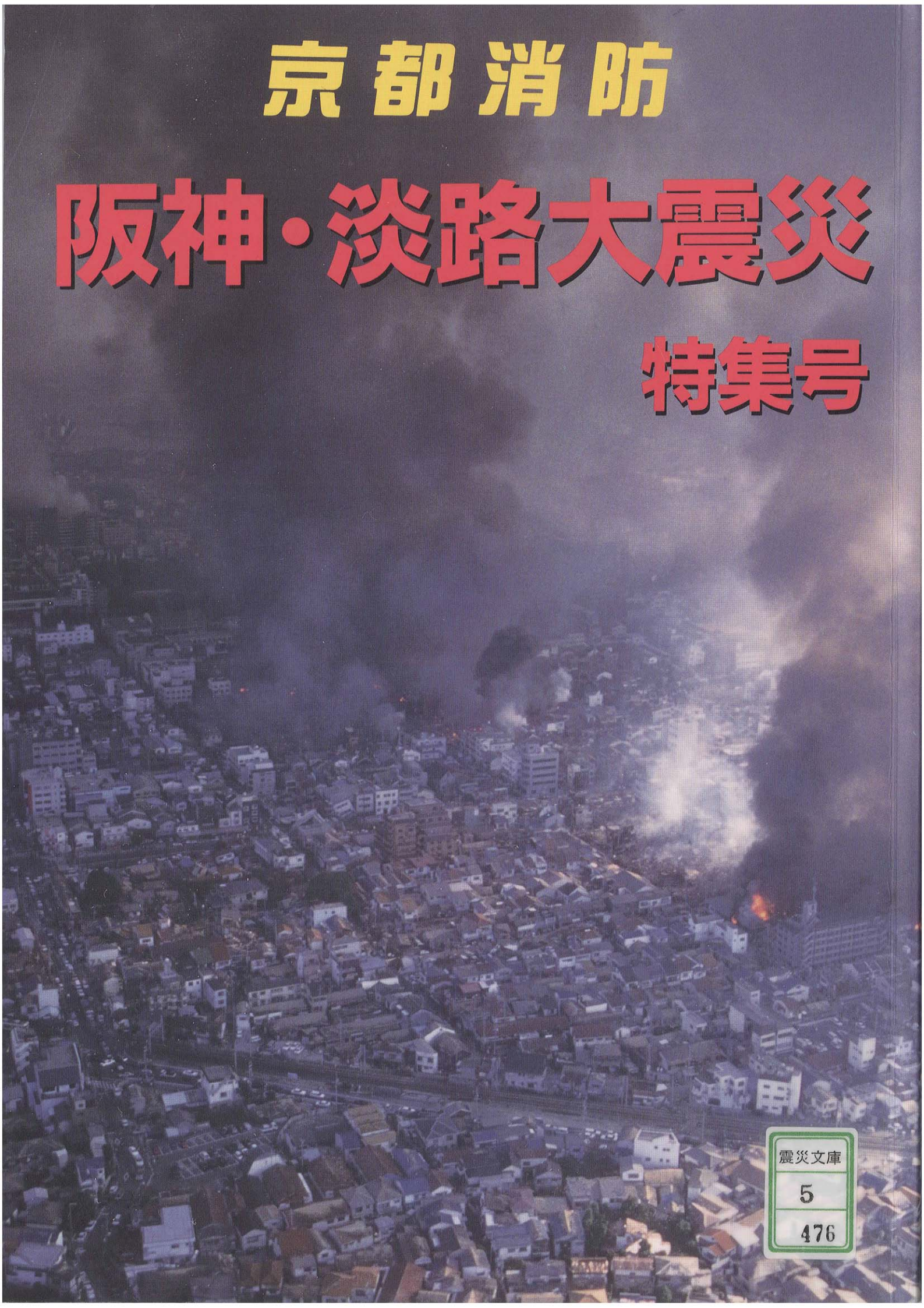
京都消防

阪神・淡路大震災

特集号



震災文庫
5
476

震災文庫 5－476

寄贈

京都消防

阪神・淡路大震災

特集号

02000097409

発刊に当たって

１月17日未明、阪神・淡路地方を襲った直下型地震は、死者5,502人、負傷者36,938人、全壊家屋10万60棟、４月現在なお避難者６万人を数える。神戸市をはじめ高度な消防力を持つ近代都市においてである。

震度７の巨大地震のすさまじさは、この被害の惨状と共に永く後世に語り継がれることだろう。

阪神・淡路大震災に際し、防災機関はどの様な活動をしたのか、各自治体の対応は、国家の危機管理システムの動きは、そして、さらに京都消防の応援各隊の活躍は…、これらの活動を史実として記録しておくべきと感じた。

その活動の良・否は別として、このことが後日、防災に携わる者の参考になれば誠に幸甚なことである。

なおまた、このことが犠牲者に対する防災担当者としての哀悼の礼であるとも思う。

追　平成７年４月１日付京都市の防災事務は総務局所管から消防局に移管、防災対策室が設けられた。事実として書き足しておく。

京都市消防局長

松井延夫

火の手は倒壊した家屋にも容赦なく迫りくる（神戸市長田区）

地震直後からいくつもの黒煙が立ち上ぼる（神戸市長田区）

6階部分が座屈した神戸市役所2号館（神戸市中央区）

交通センタービルも５階部分が座屈した（神戸市中央区）

道路の中央部分が陥没した大開通、この下を神戸高速鉄道が通る（神戸市兵庫区）

毎年多くの初詣で客で賑わう生田神社も拝殿が倒壊した（神戸市中央区）

オフィス街のビルも軒並み大きな被害を受けた（神戸市中央区）

無残な姿となってしまったビルも多い（神戸市兵庫区）

市民に親しまれた駅舎も崩れ落ちた（神戸市中央区）

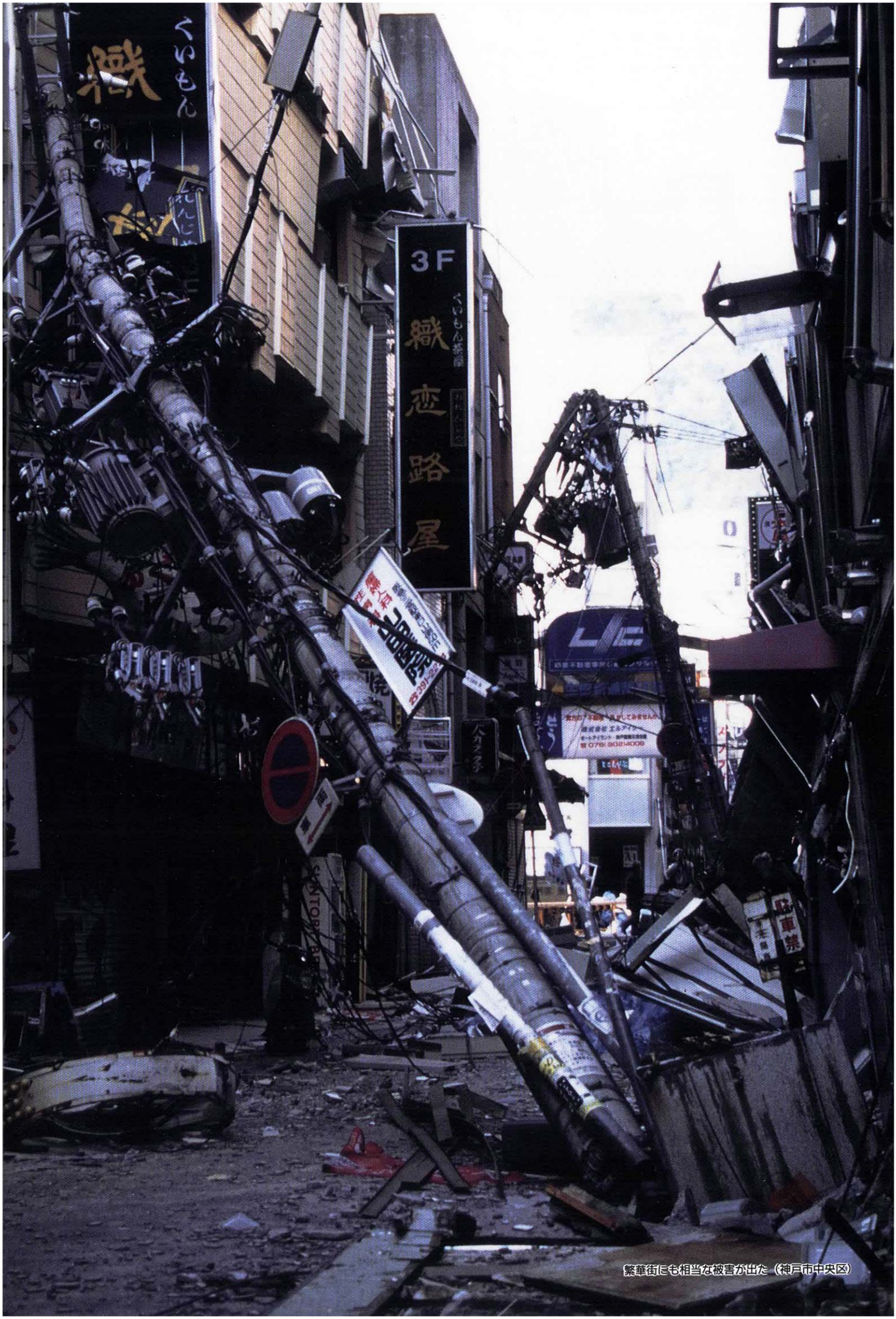
買い物客で賑わう商店街も変わり果てた姿となった（神戸市中央区）

倒れたビルが道路を遮る（神戸市中央区）

このビルはどんな姿だったのだろう（神戸市中央区）

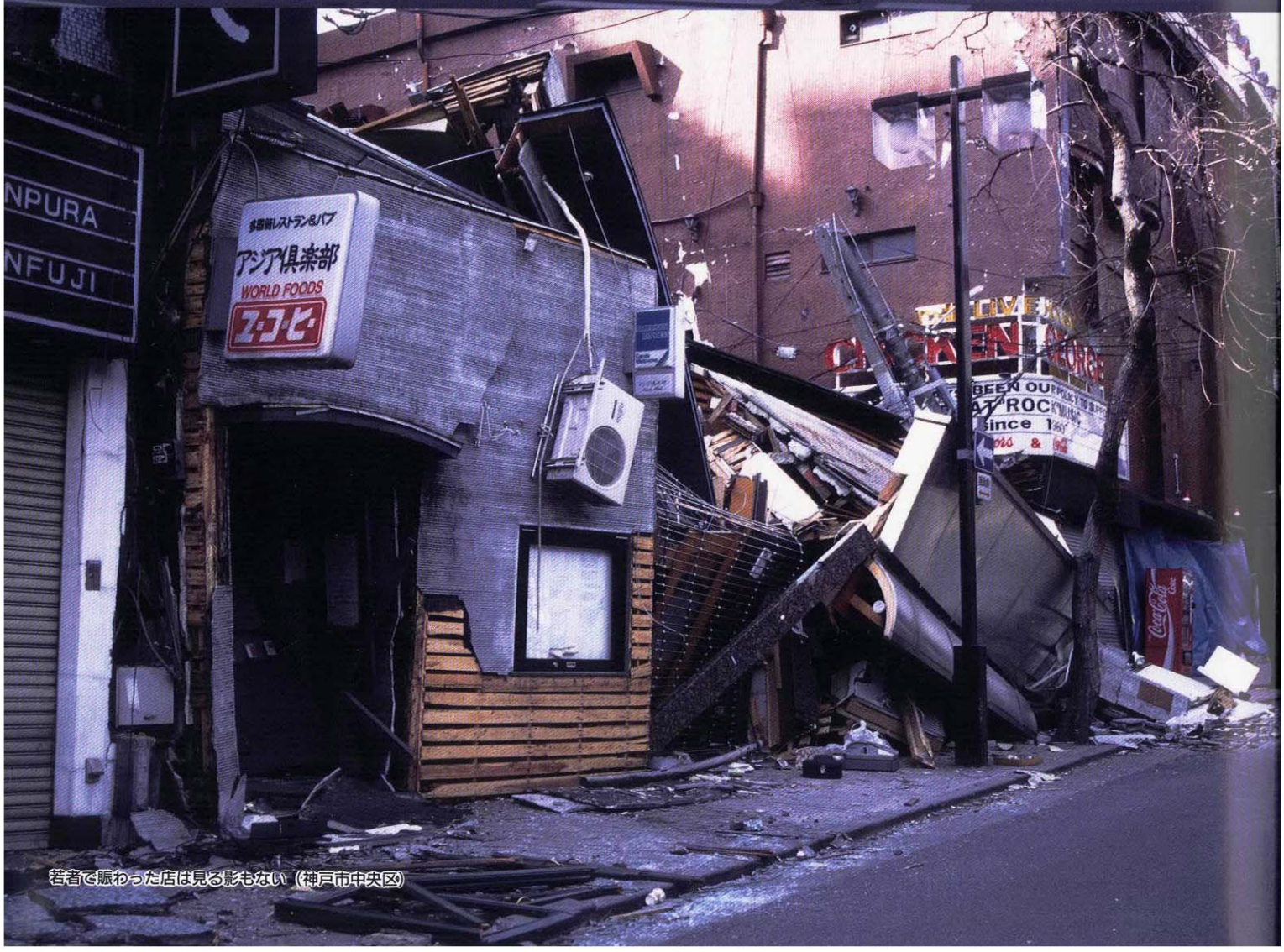
美しかった教会もその姿を変えてしまった（神戸市中央区神戸栄光教会）

しっかり立っているようでも傾いているビルも目立った（神戸市中央区）



繁華街にも相当な被害が出た（神戸市中央区）

1階が押しつぶされてしまったビル（神戸市中央区）



若者で賑わった店は見る影もない（神戸市中央区）

今にも倒れそうな建物があちこちに（神戸市長田区）

1階がガレージになった建物は1階が押しつぶされた（神戸市中央区）

崩壊した建物の瓦礫が道路を占領する（神戸市内）

倒壊した後、火災が発生したビル（神戸市中央区）

倒壊した家屋が通行を妨げる（神戸市灘区）

崩れた家屋は消火活動の支障ともなる（神戸市兵庫区）

隣のマンションに寄り掛かって辛うじて立つ（神戸市兵庫区）

建ち並んだ家屋が連鎖的に傾いた（神戸市長田区）

煙突が折れた工場（神戸市内）

灘消防署では望楼が崩れた（神戸市灘区）

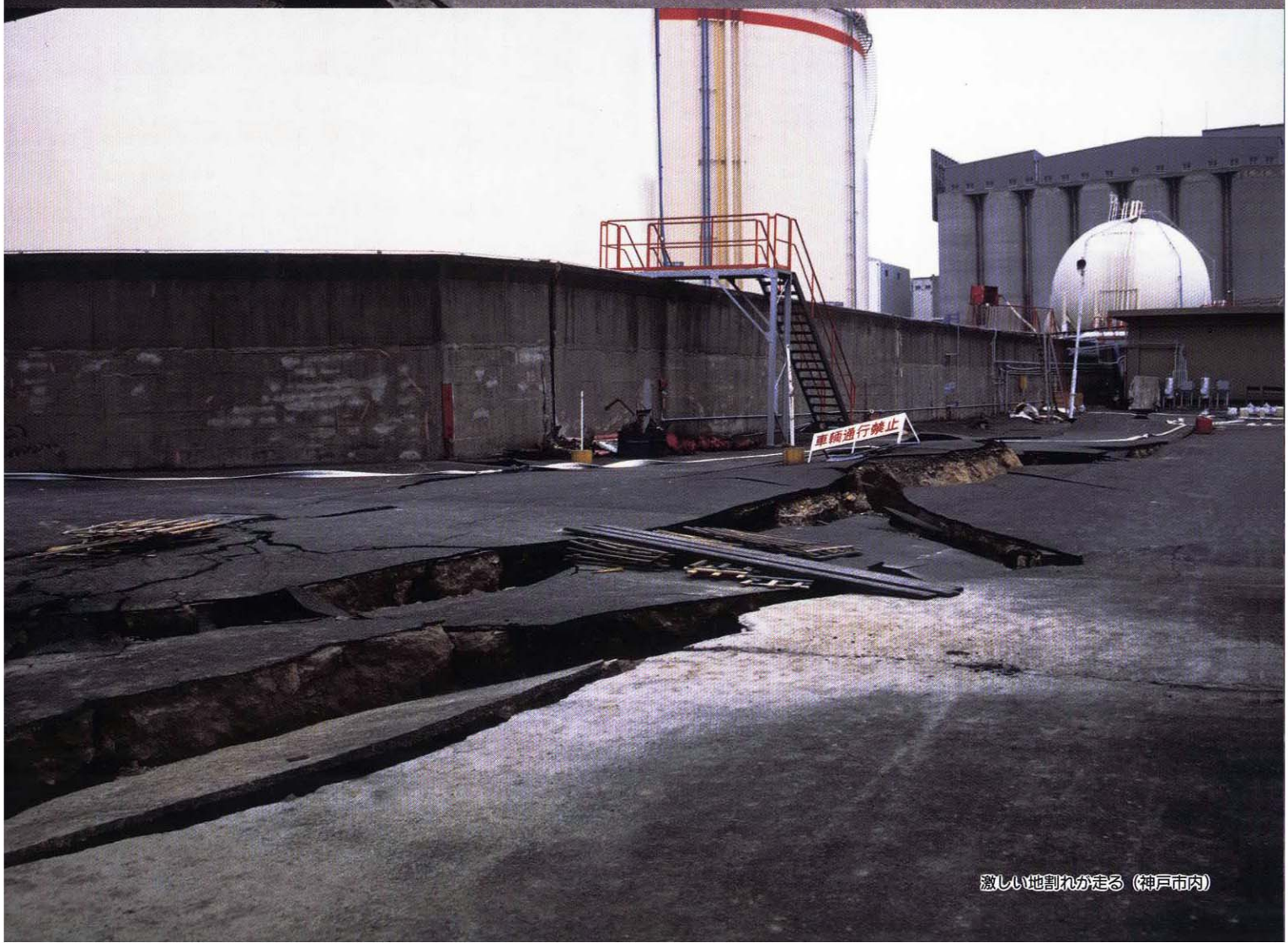
凸凹になった岸壁を消火用のホースが走る（神戸市ポートアイランド）

また新しい道路も埋め立て地では橋脚が地面にめり込む（阪神高速道路湾岸線）

陥没した道路に落ち込むトラック（神戸市ポートターミナル）

家族連れやアベックで賑わう公園の岸壁も無残に崩れ落ちた（神戸市中央区）

地盤が沈んだ岸壁（神戸市中央区）

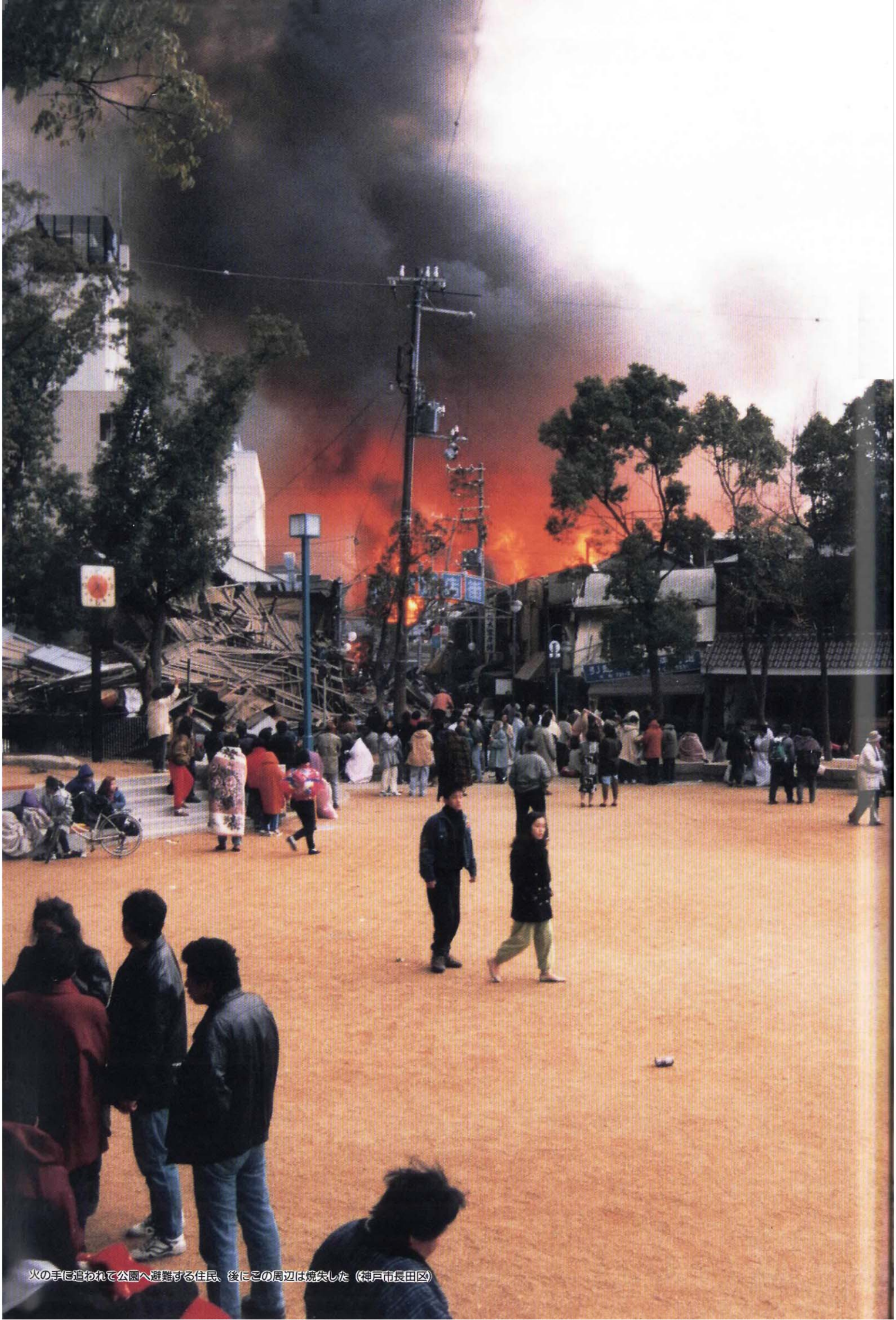


激しい地割れが走る（神戸市内）

埋め立て地では液状化現象が激しかった（神戸市内）

液状化のため全体が土色になった人工島（神戸市ポートアイランド）

各地で大規模な火災が発生（神戸市長田区）



火の手に追われて公園へ避難する住民、後にこの周辺は焼失した（神戸市長田区）

激しい火勢はつぎつぎと家屋を焼き尽くす（神戸市長田区）

火の勢いは止まるところをしらない（神戸市長田区）

倒れた民家に上がり、火の行く手を見つめる（神戸市長田区）

燃え尽きた街区は元の姿をとどめない（神戸市長田区）

神戸市全体で65万㎡が焼失した（神戸市長田区）

焼けてしまった町は道路と建物だったところの区別もつかない（神戸市長田区）

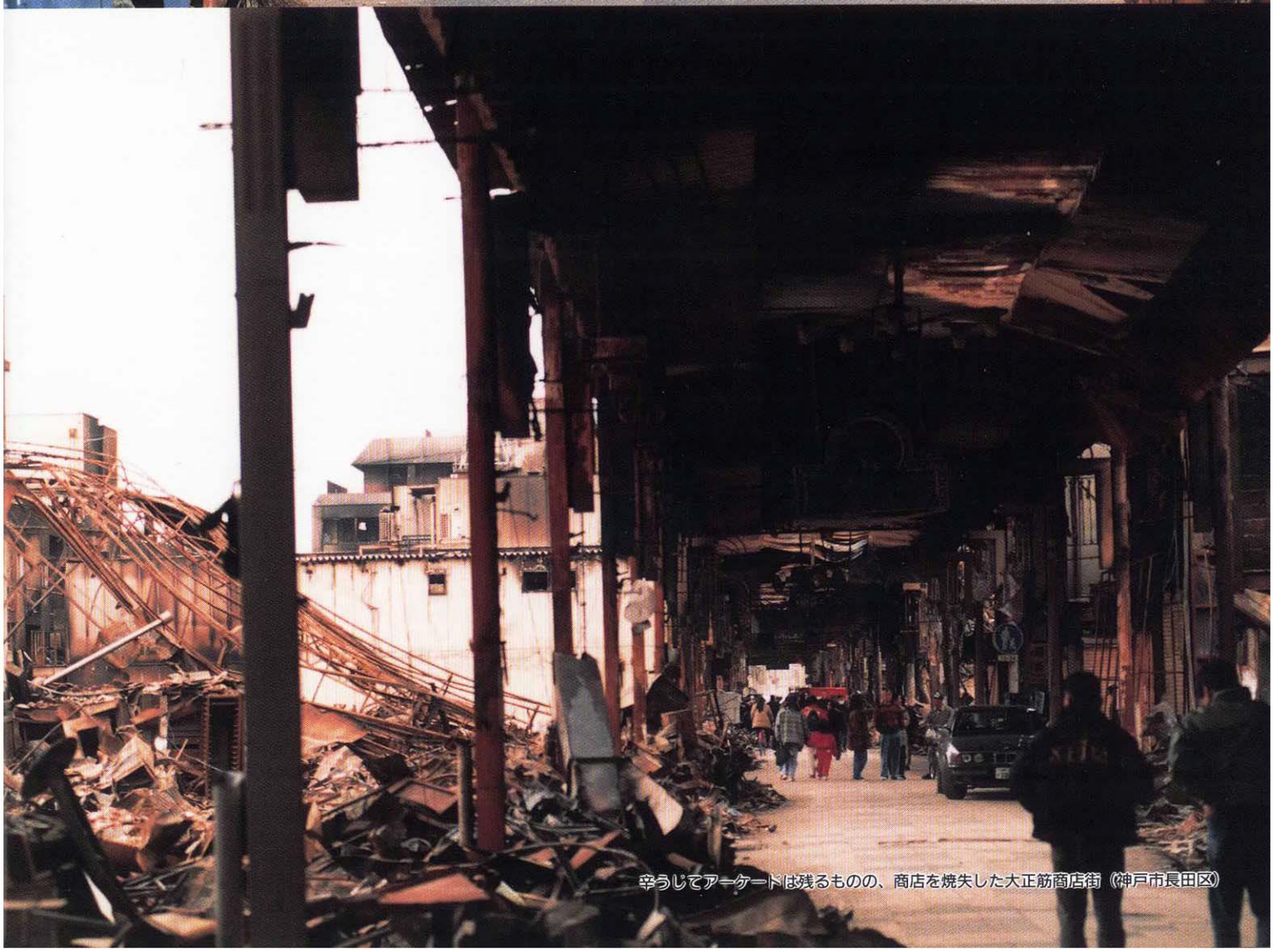
長田区に多数あった靴工場はそのほとんどが被災した（神戸市長田区）

焼け野原となった町は一枚の写真には収まりきらない（神戸市長田区）

焼失する前の姿が想像できないほど（神戸市長田区）

通常では考えられない規模の火災となった（神戸市内）

炎は建物も車もすべて焼き尽くした（神戸市長田区）



辛うじてアーケードは残るものの、商店を焼失した大正筋商店街（神戸市長田区）

ここに店があったとは信じられない（神戸市長田区大正筋商店街）

焼け跡には消火に使われた消火器が転がる（神戸市長田区）

西　　北

東　　南

焼け野原と化したところに立ち、周囲を見回す（神戸市長田区）

安否を知らせる伝言が多数貼られた（神戸市長田区）

学校や公園にはテントなどが張られ、避難所となる（神戸市内）

全国各地の消防機関が応援に駆付けた（神戸市長田消防署前）

水道が断水しているため、タンク車ヘルから給水する（神戸市東灘消防署前）

復興に向け、被害を受けたビルが取り壊される（神戸市中央区）

歴史ある建物も被害を受け、次々と壊されていく（神戸市中央区）

長年市民に親しまれた駅ビルもその姿を消す（神戸市中央区）

鉄道網の被害も大きかった（神戸市東灘区）

これから町はどのように姿を変えるのだろうか（神戸市中央区）

道路を閉鎖して解体は急ピッチで進む（神戸市中央区）

持って行き場のない瓦礫が公園に集められた（神戸市中央区）

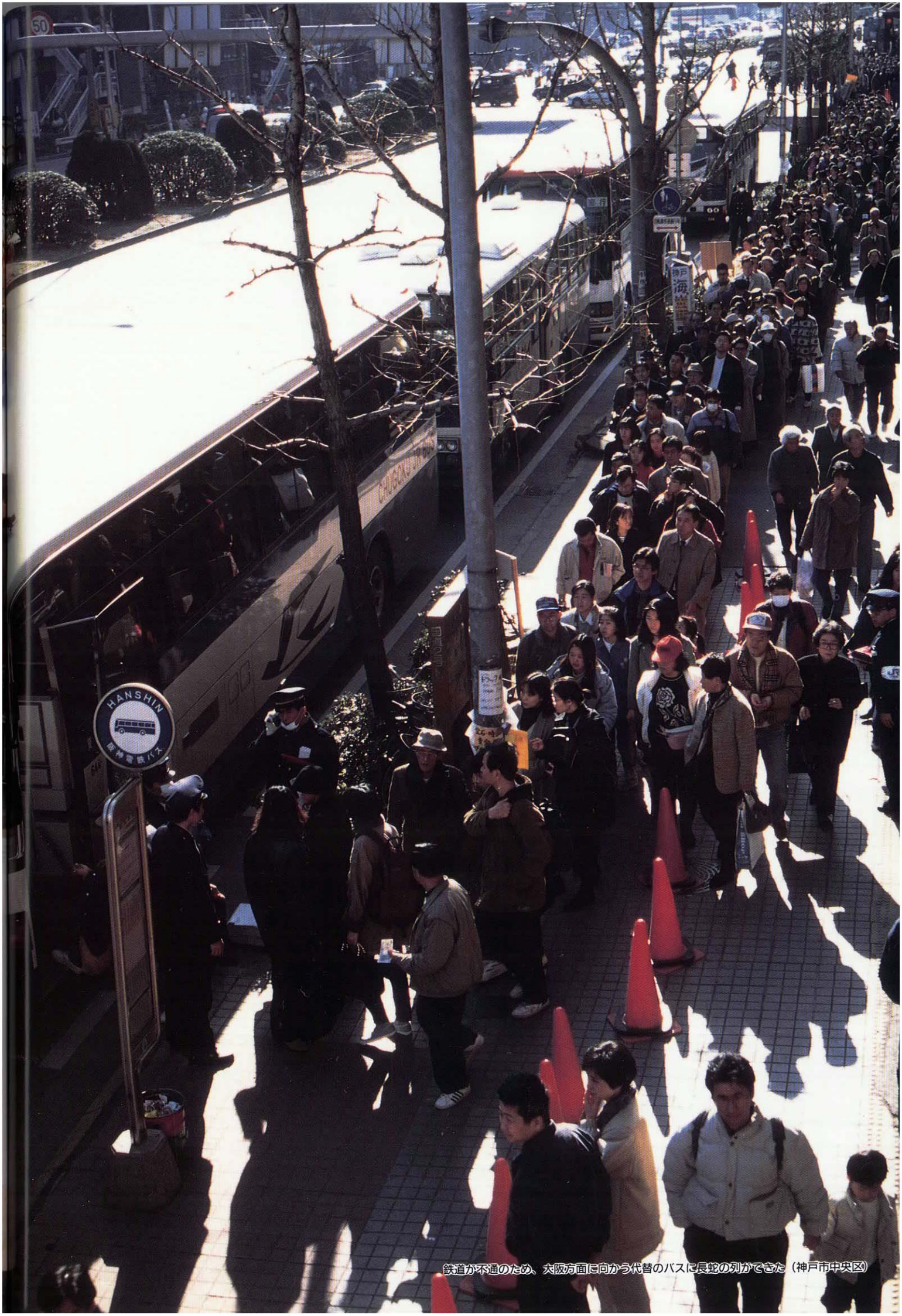
ごみや瓦礫の処理も大きな問題（神戸市内）

消防のタンク車が被災者への給水にも活躍した（神戸市内）

避難所ではさまざまなボランティアが行われた（神戸市灘区）

各地からさまざまな救援物資が送られた（神戸市東灘区）

温かい炊き出しのボランティアには列ができる（神戸市長田区）



鉄道が不通のため、大阪方面に向かう代替のバスに長蛇の列ができた（神戸市中央区）

各地から多くの人がボランティアに訪れた（神戸市灘区）

仮設住宅の入居者決定発表を食い入るように見つめる（神戸市東灘区）

仮設住宅の建設が急ピッチで行われる（神戸市中央区）

公園などが仮設住宅の建設用地となる（神戸市中央区）

市民球場に建ち並んだ仮設住宅（神戸市長田区）

避難所にいるすべての人が入居できるだけの仮設住宅を確保することが問題（神戸市中央区）

さまざまな思いで新たな生活が始まる（神戸市中央区）

阪神・淡路大震災の実像

◎大震災の規模

本震　発生時　1995年1月17日
　　5時46分
　　震央　淡路島　北緯34・6度
　　東経135・0度
（淡路島北東約3kmの明石海峡付近）
　　深さ　20km
　　マグニチュード　7.2

本震の震度分布

震度7　神戸、洲本

震度5　彦根、京都、豊岡

震度4　福井、敦賀、岐阜、多賀、四日市、津、上野、奈良、舞鶴、大阪、高野山、和歌山、南部川、美方、加西、姫路、徳島、相生、鳥取、境、津山、岡山、高松、坂出、多度津、高知、福山、呉

震度3　諏訪、飯田、富山、輪島、金沢、名古屋、伊良湖、尾鷲、潮岬、室戸岬、西郷、米子、松江、広島、松山、萩、山口、大分

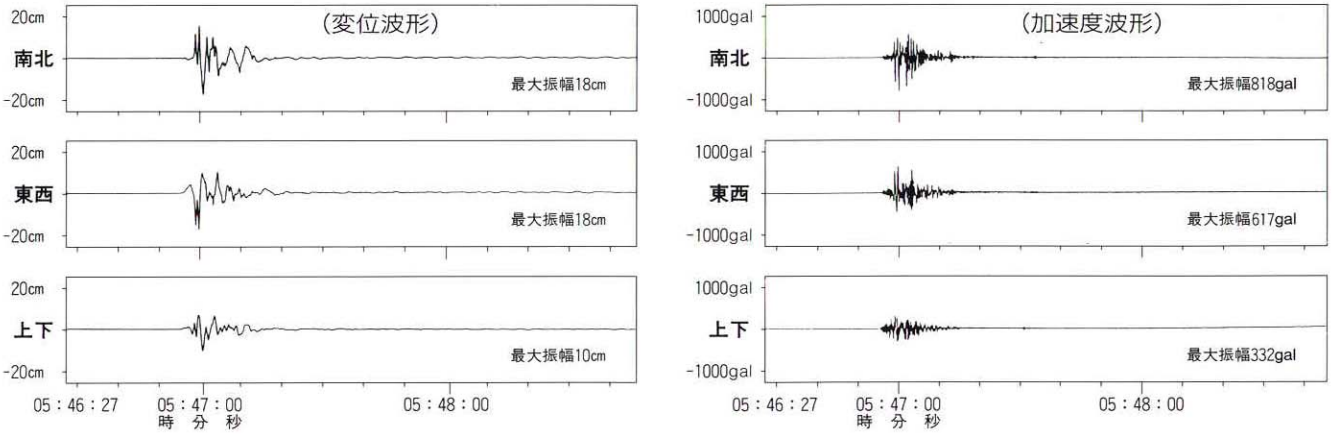
震度2　高田、長野、軽井沢、松本、横浜、甲府、河口湖、三島、静岡、御前崎、浜松、伏木、高山、宇和島、宿毛、下関、日田、宮崎、都城、佐賀、熊本、人吉

震度1　小名浜、新潟、水戸、柿岡、宇都宮、前橋、熊谷、秩父、東京、千葉、館山、網代、神津島、浜田、足摺、延岡、福岡、平戸、鹿児島

＊気象庁は1月20日に、神戸市三宮地区及び淡路島北部の一部は震度7の激震と判定。更に2月7日に、神戸市須磨区から西宮市にかけて長さ約20km、幅約1kmの帯状の地域、宝塚市、淡路島の北淡、一宮、津名町でも震度7が確認されたと発表した。

図1　各地の震度

図2　地震波形神戸海洋気象台（震度6）に設置された電磁式強震計の波形



地震動をとらえるために、全国の気象台や大学の観測施設などに地震計が設置されている。

地震計は、地震動を「加速度」でとらえたり「速度」や「変位」でとらえたりするが、どれか一つのデータだけでは、地震の全体像をつかむことはできない。たとえ瞬間的な加速度が大きくても、地盤が動く速度や動いた距離（変位）が小さければ、被害はそれほどでもないというように……。

グラフは、震源に近い神戸海洋気象台の強震計がとらえた、阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）の地震動である。

大地の激しい揺れは、地震発生から約20秒でほぼ終わっており、最大加速度は南北方向で818ガル、東西方向で617ガル、上下方向が332ガルだった。東西方向より南北方向の揺れが激しかったことを物語っている。

また、このグラフから、南北方向に最大秒速90センチと、国内で観測された地震の中では、最も速く地盤が動いたこともわかった。

全国に高精度の地震計が配備されたのはそう遠い昔のことではなく、都市直下型の大地震の地震動が精密にとらえられた例はそれほど多くない。それだけに、被害調査と合わせて、今後の耐震設計の見直しなどに役立てられる貴重なデータである。

図3 余震活動(気象庁)

☆時間別地震回数（2月6日15時まで、1日3時間ごとの集計）

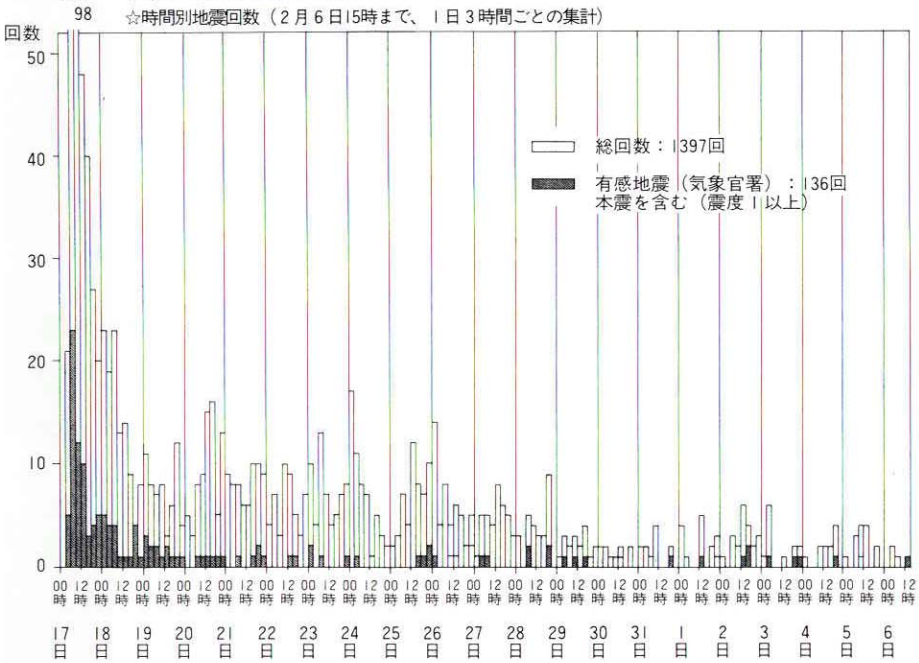


表1 余震活動 主な地震（気象庁）

主な地震（最大震度4以上）

①17日05時46分(本震)	最大震度7	(神戸・洲本)
② 05時49分	最大震度4	(神戸)
③ 05時52分	最大震度4	(神戸)
④ 07時38分	最大震度4	(奈良)
⑤ 08時58分	最大震度4	(神戸)
⑥21日21時12分	最大震度4	(北淡町)
⑦23日00時33分	最大震度4	(北淡町)
⑧25日23時16分	最大震度4	(神戸・西宮・大阪西淀)

※1月25日12時より、臨時観測点（北淡町、神戸垂水、西宮市、大阪西淀）の計数を開始した。

【前震、本震、余震】 大きな地震（本震または主震）が発生すると、引き続いてたくさんの比較的小さな地震（余震）が起こる。また、本震に先立って小さな地震（前震）が起こることがある。大きな本震の後には余震が続くことが多いが、前震が観測されることはあまり多くない。また、本震の震源が深いと、余震もあまり観測されないことがある。

表2 明治以降の主な地震（理科年表など）

地震名	発生日時	規模(M)	被害状況
濃尾地震	1891年（明治24）10月28日	8.0	内陸地震としては最大のもの。建物全壊14万余戸、半壊8万余戸、死者7273人。
東京湾北部地震	1894年（明治27）6月20日	7.0	東京、横浜の被害が大きかった。神田・本所・深川で全半壊の家屋多数。東京で死者24人。川崎・横浜で死者7人。この地震で銀座のレンガ街が崩れた。
関東大震災	1923年（大正12）9月1日午前11時58分	7.9	地震後火災が発生し被害を大きくした。死者不明14万2千余人、家屋全半壊25万4千余戸、焼失44万7千余戸。
北但馬地震	1925年（大14）5月23日午前11時10分	6.8	円山川中心に死者428人。地震計振幅は関東大震災の62㌢を超える84㌢を記録した。
北丹後地震	1927年（昭2）3月7日午後6時28分	7.3	若狭湾中央が震源地の大地震。死者2925人。全壊家屋は12584戸。
鳥取地震	1943年（昭18）9月10日午後5時37分	7.2	鳥取市・大黒座に出演中の役者・大谷友右衛門など死者1083人。
東南海地震	1944年（昭19）12月7日午後1時36分	7.9	静岡・愛知・三重などで死者不明1223人。全壊家屋1万7千余戸。
三河地震	1945年（昭20）1月13日午前3時38分	6.8	震源地は渥美湾。中部・関東・近畿・四国の一部と広範囲にわたる。死者2306人。
南海地震	1946年（昭21）12月21日午前4時19分	8.0	近畿・中国・四国から東海道方面に被害が及んだ。死者1330人。
福井地震	1948年（昭23）6月28日午後5時15分	7.1	直下型地震で福井市の家屋全壊3万6千余戸。同刑務所の囚人60人が逃走。死者3769人。
十勝沖地震	1952年（昭27）3月4日午前10時23分	8.2	震源地は襟裳岬東方海底。日高・十勝・釧路方面の被害甚大。死者28人。
新潟地震	1964年（昭39）6月16日午後1時過ぎ	7.5	同市内・昭和石油の石油タンク爆発、昭和大橋などが落橋などの被害。死者26人。
1968年十勝沖地震	1968年（昭43）5月16日午前9時49分	7.9	地震の規模が関東大震災級。北海道・東北が被害。死者52人。八戸で7000㌧級の外国船が座礁。コンクリート造り建築の被害が目立った。
伊豆半島沖地震	1974年（昭49）5月9日午前8時33分	6.9	伊豆半島南部沖で発生。死者不明30人。家屋全壊134戸。同半壊240戸。
伊豆大島近海地震	1978年（昭53）1月14日午後0時24分	7.0	伊豆天城湯ヶ島町の鉱業所のシアン化合物が川・湾に流出。死者25人。当日午前、気象庁から地震情報が出されていた。
宮城県沖地震	1978年（昭53）6月12日午後5時14分	7.4	仙台市を中心に住宅地のブロック塀の倒壊が続出し問題化。死者28人。
日本海中部地震	1983年（昭58）5月26日正午過ぎ	7.7	秋田・男鹿市の加茂海岸で津波により、遠足の小学生ら死者104人。
釧路沖地震	1993年（平5）1月15日午後8時6分	7.8	震度6を11年ぶりに記録。死者2人。ケガ人約1000人。北海道東部では4万7000戸が停電。
北海道南西沖地震	1993年（平5）7月12日午後10時17分	7.8	奥尻島などに津波。死者202人。日本海で発生した地震では史上最大規模。
北海道東方沖地震	1994年（平6）10月4日午後10時23分	8.1	国後、択捉、歯舞、色丹の北方4島で大きな被害。根室市内では40人が負傷。
三陸はるか沖地震	1994年（平6）12月28日午後9時19分	7.5	八戸市中心に被害。死者2人。岩手県内で200人以上がケガ。青森県と岩手県で約7万戸が停電。

阪神・淡路大震災の被害状況

◎震災の被害状況（全国）

（3月16日現在　自治省消防庁災害対策本部資料、一部数値は直近把握分）

死者	5、502名
負傷者	36、938名
行方不明者	2名
住家被害	
・全壊	100、060棟
・半壊	85、957棟
・一部破損	（＊1）37、842棟
・合計	223、859棟
非住家	
・公共建物	549棟
・その他	3、120棟
火災	293件
文教施設等	591箇所
道路	9、402箇所
ブロック塀等	1、367箇所
水道断水	（＊2）約44、000戸
ガス供給停止	約102、000戸
停電	（＊3）（20万世帯）
電話不通	（＊4）（75万回線）

＊1　兵庫県分の一部破損は調査中であり、含まれていない。

＊2　水道断水の最大障害時の規模は、約95万世帯の断水

＊3　電気は1月23日全面復旧、（　）内は最大の障害時の規模

＊4　電話は1月31日全面復旧、（　）内は最大の障害時の規模

◎主な市町村の被害状況

・神戸市

（神戸市災害対策本部、2月23日現在）

死者	3、897名
行方不明者	2名
負傷者	14、679名
全半壊家屋	86、732棟
火災件数	445件
焼失面積	1、000、000㎡
り災世帯	22、000世帯

・大阪市

（大阪市市民局、2月14日現在）

死者	9名
行方不明者	なし
負傷者	358名
全半壊家屋	1、962棟
火災件数	16件
焼失面積	1、445㎡
り災世帯	データなし

・淡路島地区

（淡路県民局、2月15日現在）

死者	57名
行方不明者	なし
負傷者	1、162名
全半壊家屋	8、049棟
火災件数	データなし
焼失面積	データなし
り災世帯	データなし

・西宮市

（西宮市消防局、2月11日現在）

死者	999名
行方不明者	なし
負傷者	1、162名
全半壊家屋	33、268棟
火災件数	39件
焼失面積	9、610㎡
り災世帯	131世帯

・尼崎市

（尼崎市災害対策本部、2月19日現在）

死者	27名
行方不明者	なし
負傷者	3、786名
全半壊家屋	4、569棟
火災件数	8件
焼失面積	2、673㎡
り災世帯	14棟

・宝塚市

（宝塚市消防本部、2月12日現在）

死者	83名
行方不明者	なし
負傷者	1、100名
全半壊家屋	5、057棟
火災件数	4件
焼失面積	173㎡
り災世帯	データなし

・芦屋市

（芦屋市消防本部、1月27日現在）

死者	396名
行方不明者	なし
負傷者	1、100名
全半壊家屋	4、062棟
火災件数	14件
焼失面積	5、422㎡
り災世帯	21世帯

京都市内の被害概要

総務局総務部総務課、2月17日現在

〈人的被害〉

重傷者　1名

軽傷者　28名

重傷者は、敷居に躓き転倒、骨折。タンスの転倒、落下物による負傷者。

〈住家被害〉

全焼　マンション1室1世帯（西京区）

一部損壊　750戸

被害の多くは、屋根瓦がずれたり、落ちたりしたもの。

集中している地域

西京区樫原地域・山田地域450戸

右京区西京極地域　30戸

左京区浄土寺近辺　10数件

給油取扱所　11件

ガラスのひび割れ　6件

壁の亀裂　2件

水道管漏水　2件

防火塀一部破損　1件

〈文教施設被害〉

一部損傷　166校

被害は、校舎の窓ガラスが割れた他、壁・校舎の繋ぎ目部分にひびが入ったもの等。

窓ガラス被害（約2、300枚）

伏見区小栗栖小学校　397枚

山科区百々小学校　326枚

西京区新林小学校では、通路・土間が陥没し、塀に亀裂が入るなどの大きな被害が出ている。

〈清掃施設被害〉

一部損傷　4件

南第一清掃工場で磁選機が脱落するなどの被害は出たが、ごみ処理能力に影響が出るほどのものではなかった。

〈道路等被害〉

陥没、亀裂　5件

落石　2件

河川　4件

公園　2件

一般府道七条大宮四ツ塚線（大宮通）東海道本線跨線橋で、橋脚2本の座面に亀裂（最大長さ4m20cm、最大幅12mm）が総計15本入った。

西京区大原野東竹の里で、延長130mにわたり、陥没（段差10cm）が生じた。

西京区樫原蛸田町を流れる、荒木川・シゲ田川では、擁壁と底板の接点が分離し、幅1～3cmほどの隙間（延長14～15cm）が発生した。

公園では、南区久世橋西詰公園にて、幅5～6cm、深い所で1mほどの亀裂が、相当の延長で生じた。

〈ライフライン〉

水道施設

右京区山ノ内浄水場で、停電により遮断装置が作動。

断水世帯　334世帯

（内右京区で248世帯）

通信施設

電話不通　400世帯

〈その他〉

ため池　4カ所

西京区大原野で、ため池の張ブロックに亀裂が入り、漏水したもの。

社寺仏閣　78件

（指定文化財36社寺を含む）

仏像・石灯籠・墓石の倒壊、屋根瓦の破損、土塀・壁の剝離や亀裂などの被害。

仏像（30躯）

右京区　清涼寺

阿弥陀如来像（国宝）

木造四天王立像（重文）

木造十大弟子立像（重文）7躯

右京区　広隆寺

聖徳太子像（重文）

木造阿弥陀如来像（重文）

木造聖観音像（重文）　他

建物関係の主な被害

北区　大徳寺

唐門東脇土塀破損（国宝）

北区　竜光院

書院の西外壁亀裂、雨樋破損（国宝）

東山区　高台寺

霊屋の蒔絵ひび（国宝）

東山区　豊国神社

唐門飾金具の歪み、鉄落下（国宝）

山科区　勧修寺

書院壁亀裂、落下（国宝）

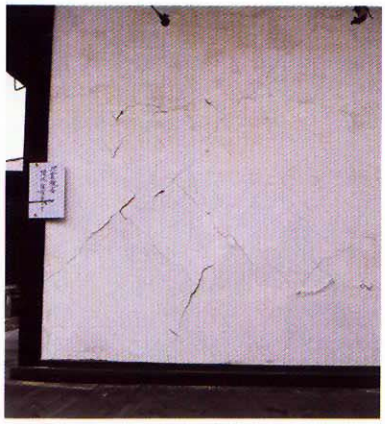
南区　教王護国寺

五重塔長押、天井琵琶板落下（重文）

伏見区　醍醐寺

金堂、五重塔漆喰壁亀裂（国宝）

三宝院殿堂表書院漆喰壁亀裂（国宝）



山科区勧修寺　書院（国宝）の亀裂

◎京都市消防局の出動状況

火災　1件

西京区内マンション　1室20㎡焼失

救急事故　26件

重傷1名、中等症5名、軽症23名　計29名搬送

救助事故　10件

タンス1件、エレベータ9件

ガス漏洩等　24件

流出1、漏洩12、電気1、救急支援1、発報8、その他1

119通報件数　607件

京都市内の被害情況

1

2

4

3

6

5

7

1　西京区大原野南春日町　金蔵寺
2　西京区大枝西長町　天理教会
3　伏見区中島宮ノ前町　城南宮
4　西京区樫原蛸田町　民家
5　西京区大原野南春日町　西迎寺
6　西京区樫原宇治井町　民家
7　西京区大原野小塩町　善峰寺
8　伏見区淀本町　稲葉神社
9　伏見区久我森ノ宮町　久我神社

9

8

京都市の支援概要（1月17日～3月16日）

1　消防関係〈消防局〉

◎主な集計

救助隊・救急隊・消防隊等の派遣：延べ892名、ヘリ延べ60機、車輌延べ153台

り災証明発行事務派遣：延べ60名

(1)　消防救助救急活動支援（神戸市へ）

1/17～2/16　救助隊・救急隊・消防隊等の派遣：職員延べ780名、ヘリ延べ32機、車輌延べ153台

2/17～　航空隊の派遣：職員4名／日、ヘリ1機／日

職員延べ112名、ヘリ延べ28機派遣

(2)　り災証明発行（火災による）に伴う事務等

1/29～2/3　10名／日：延べ60名

(3)　物資支援

食糧10、500食、飲料水6、000本、乾電池5、600個、ホース102本他

(4)　活動状況

ア　消防隊

・街区火災の消火活動

・水槽車による消火活動及び残火整理

イ　救助隊

・西市民病院の人命救助活動

・水笠町、重池町付近の人命救助活動

ウ　救急隊等

・長田署を拠点に救護活動

エ　消防航空隊

・救急患者の空輸

・被災児童の搬送

・物資輸送等

2　食糧関係〈総務局・経済局〉

◎主な集計

弁当298、400食、乾パン等12、880食、牛乳（200cc）100、000個、派遣：職員延べ56名

(1)　神戸市への支援

1/17～1/31　弁当143、400食、牛乳20、000個、乾パン5、000食、パン5、000個を搬送

＊神戸市については1/20、21、24～30は自衛隊による空輸

(2)　芦屋市への支援

1/17～1/31　弁当55、000食、牛乳（200cc）80、000個、乾パン2、880食を搬送

2/1～2/10　弁当約10、000食／日を搬送

＊空輸以外については京都府トラック協会の協力によるトラック輸送

3　上下水道関係〈水道局・下水道局〉

◎主な集計

〈上水〉派遣人員：延べ2、127名

4トン給水車：延べ117台　500ℓ給水車：延べ11台　作業車：延べ1、126台

20ℓポリタンク725個、10ℓポリ袋2、000袋

〈下水〉派遣人員：延べ368名

作業車等：延べ178台

〈その他〉復旧用機器・資材、検査試薬等提供

（上水関係　神戸市へ）

1/17～2/16　〈給水作業、給配水設備修繕作業、給水管修繕作業等〉

4トン給水車　延べ62台、人員延べ938名　他ポリタンク等提供　500ℓ給水車延べ11台、作業車延べ498台　派遣

2/17～　〈給水作業、給配水設備修繕作業、給水管修繕作業等〉

4トン給水車　延べ55台、人員延べ1、189名、作業車延べ628台　派遣

1/27～　残留塩素測定器4台等持参／日

（下水関係　神戸市へ）

1/21～2/16　〈管渠調査及び清掃応急処置作業、下水道施設査定資料作成業務（下水道管渠施設の設計及び積算）等〉

作業車等　延べ61台、人員延べ118名　派遣

2/17～3/5　〈下水道施設査定資料作成業務（下水道管渠施設の設計及び積算）〉

作業車等　延べ17台、人員延べ70名　派遣

4　医療・衛生関係〈衛生局〉

◎主な集計

医療班の派遣：医師延べ132名、看護婦・保健婦　延べ270名、事務職員等延べ237名

遺体の火葬処理の受入：189体

医薬品等の搬送：2トントラック5台・ワゴン車等5台相当分

(1)　神戸市への支援

1/17～2/13　応急医療品・医薬品、防疫用薬剤、簡易寝具等の搬送（2トントラック5台・ワゴン車等4台相当分）

医療班の派遣：民間医療団の支援及び民生局との協力を含む

医師　延べ116名、看護婦延べ174名、事務職員等　延べ99名

（＊1/29～31　医療救護班（精神科医師1名／日）

遺体の火葬処理の受入111体

1/31～2/28　防疫対策班（職員6名／日）派遣（延べ86名）

＊2泊3日のローテーションで派遣

2/13～　保健婦（2名／日）派遣（延べ64名）

3/1～　食品衛生対策班（3名／日＊土日を除く）派遣（延べ36名）

3/1～　第2次医療救護班（医師1名、看護婦2名、事務員1名／日）

派遣（延べ医師16名、看護婦32名、事務員16名）

(2) 芦屋市への支援

1/20～1/22 遺体の火葬処理の受入39体

(3) 西宮市への支援

1/20～1/23 遺体の火葬処理の受入39体

(4) 伊丹市への支援

1/25 防疫用消毒液・器材等搬送（ワゴン車1台相当分）

(5) 各保健所にて災害救助法適用地域の被災者から相談があれば、予防接種・母子検診関係等の業務を緊急的に対応

(6) 被災患者の受入れ

3/15現在 京都市立病院で83名受入れ（外来：74名、入院9名）

(7) 被災地の大気汚染状況調査のため、採取された検体計70件を衛生公害研究所で受入・分析

5 住宅関係〈住宅局〉

◎主な集計

建築技術職員の派遣：延べ108名

公営住宅の供給70戸、改良住宅の確保約20戸、公営住宅の確保（第2次分）30戸

(1) 建築技術職員の派遣

被災建築物の倒壊等から生じる二次災害の防止等を目的に、応急危険度判定支援のため、建設省、周辺府県等と合同で1日当たり2～7名の職員を派遣した。

1/18～21 延べ20名を神戸市へ派遣

1/23～24 延べ4名を宝塚市へ派遣

1/26～2/5 延べ73名を宝塚市、尼崎市へ派遣

(2) 被災者への公営住宅等の供給

ア 公営住宅70戸分（向島47戸、洛西23戸）を供給

受入期間：兵庫県南部地震発生日から1年以内

対 応：家賃及び敷金は免除、生活用品の支給 ＊民生局と協力（照明器具、ガスコンロ、暖房器具、食器、炊事道具、寝具、下着類等）

イ 改良住宅20戸程度を確保

受付方法、入居者の選定等は、兵庫県及び神戸市改良住宅担当部局と協議中

受入期間：兵庫県南部地震発生日から1年以内 ＊家賃及び敷金は免除

(3) 民間住宅の情報提供

民間ボランティアなどから被災者への住宅提供の申出を神戸市災害対策本部へ情報提供する。〈情報提供戸数 525戸〉

(4) 公共建築物の復旧計画作成に係る支援（神戸市ほか）

建設省、周辺府県等と合同で実施

2/22～3/8（土日を除く）職員1名／日派遣（延べ11名）

6 清掃関係〈清掃局〉

◎主な集計

人員の派遣：延べ284名

移動公衆便所8台、ロードパッカー車等延べ103台

(1) 神戸市への支援

1/24～1/27 移動公衆便所8台の搬送及び据え置き、人員10名を派遣

ごみ収集（ロードパッカー車延べ37台、人員延べ104名派遣）

＊移動公衆便所8台については、現在も現地据え置き中

(2) 西宮市への支援

2/6～2/11 ごみ収集（ロードパッカー車延べ36台、その他車輌延べ12台、人員延べ134名派遣）

(3) ごみの収集

被災地の救援活動を行う民間ボランティアによる廃棄物の受入れ

1/26～ 西清掃工場にて受入れ 受入件数2件（3/16現在）

(4) 伊丹市からの廃棄物受入れ

3/27～ 3月末 南清掃工場第一工場・廃木材の受入対応（日量50トン程度）

3/6～ 受入支援に係る派遣（10トンダンプ2台、職員4名／日＊土日を除く、延べ車輌18台、職員36名）

7 教育関係〈教育委員会〉

◎主な集計

一時留学（ラーニング・ステイ）受入 累計76名（＊110名受付）

一時留学（ラーニング・ステイ）従事者（ボランティアを含む）3,350名

児童・生徒の転入学受入 累計679名

派遣職員：延べ199名

(1) 「一時留学（ラーニング・ステイ）」の実施

1/24 「一時留学」実施事務局設置、申込受付開始

西京商業高等学校「セミナーハウス」（中・高校生30名程度）

野外教育施設「花背山の家」「やましなの家」（小・中学生100名程度）

＊受入れ期間：平成7年3月末まで

3/16 正午現在 累計76名受入（被災地での学校再開による帰宅等のため在籍22名）

＊児童生徒の受入にあたっては、消防局のヘリによる移送や職員による現地出迎え、受入時の健康診断、心理相談等による対応を実施

＊受入内容：教育委員会職員、教職員等による24時間体制での対応

（1/26～ 延べ3,350名が従事）

・衣類の用意、洗濯、食事等生活関係一切の引き受け

・児童・生徒への心のケア、健康相談、学習指導（放課後、夜間の補修授業等）の実施

・放課後、夜間の補修授業の実施

＊通常開始 1/30～ 堀川高校、

1/31～ 朱雀第八小学校、北野中学校

2/1～ 別所小学校

＊ボランティアの募集
「一時留学」受入等のため広くＰＴＡ、女性会、市民有志のボランティアを募集、活躍していただいている。

(2) 児童・生徒の転入学受入
1/20 被災児童・生徒の迅速かつ円滑な受入について全校に通知
＊学校給食費の公費負担、市立高等学校授業料及び幼稚園保育料の減免等で対応
1/26 就学援助の特別措置について全校に通知し徹底
3/16 正午現在 累計679名（学校数194校園）を受入
（内訳 幼15、小572、中80、高10、養2）
＊教育委員会指導主事が受入校を順次訪問し、指導の徹底を図っている。
＊障害のある児童・生徒の受入（障害に応じて医療機関等と連携して市立養護学校に受入）

(3) 被災生徒を対象とした市立高等学校特別入学者選抜の実施及び受験手数料の免除

(4) 被災児童・生徒に対する「心のケア」
1/30 子どもたちのカウンセリング、「心のケア」に関する留意事項をまとめ、全校・園に通知するとともに、臨時校長会を開催し徹底
3/1 災害後ストレス障害への対応を全校・園に通知

(5) 「教育何でも相談ホットライン（永松記念教育センター）」の設置（相談員2名配置）

(6) 市立図書館、科学センター等全教育機関（20カ所）における義援金の受付け

(7) 各学校、ＰＴＡにおける支援活動の推進
・児童会・生徒会による自主的な募金活動の実施（全校で実施）
・神戸市教育委員会からの学用品援助要請（1/26）に基づき、全校に学用品の提供を重ねて要請
・1/30～ 統合閉鎖校（元格致小学校）に支援物資の集約・分類・発送センターを設置（職員2名とボランティアを配置）2/15、18、28トラック便で発送
・2/5 小学校大文字駅伝に被災児童を招待（街頭募金活動も実施）

(8) 移動図書館「こじか号」の派遣（図書約1、800冊積載、義援金及び支援物資も移送）
・1/29、2/4、11、18、24、3/4、11（神戸市立本庄小、本庄中、菊藻中、志里池小ほか）職員5名派遣／回（3/18、25派遣継続）

(9) 市立学校教員「ボランティア」の募集（1/26～）及び派遣
神戸市の子供たちの学習支援に教職員を派遣するため、教員ボランティア募集
1/28 18名派遣、1/29 19名派遣
2/4 15名派遣、2/11 17名派遣
2/18 12名派遣、2/25 9名派遣
＊神戸市から要請があり次第順次派遣する

8 民生・福祉関係〈民生局〉

(1) 被災者の一時受入対応
ア 中央保護所
＊3/15正午現在12名受入（実績）
イ 洛西ふれあいの里〈受入期間1/30～3/31〉
受入定員 和室4人×9室＝36人
洋室3人×5室＝15人
合計51人（他 大広間50人程度可能）
＊3/15現在23名受入（実績）
ウ 高野福祉施設合同会館「高野寮」「紫山寮」
受入期間：平成7年2月6日～平成8年2月29日の間
受入定員：26戸（1戸あたり約56㎡）
＊3/15現在12戸31名受入

(2) 被災者の公営住宅受入に伴う生活必需品等の調達 ＊住宅局と協力

(3) 市営葬儀事務所の利用料金の減額
1/26～今回の災害により亡くなられた方が利用される場合に、利用料金を減額する。（10歳未満：10、000円に、10歳以上：15、000円に）

(4) 被災者への福祉サービスの提供（1/26～）
利用料は、原則として生活保護世帯と同様の取扱いとする。
〈福祉事務所〉
・こどものショートステイ事業
・母子家庭、寡婦及び父子家庭介護人派遣事業
・父子家庭家事援助サービス事業
・デイサービス事業（老人・障害）
・ホームヘルパー派遣事業（老人・障害）
・日常生活用具給付等事業（老人・障害）
・補装具の交付・修理事業
・短期入所事業（障害）
〈児童相談所〉
・重度心身障害児（者）緊急一時保護事業
〈中央老人福祉センター〉
・短期入所事業（老人）

(5) 福祉施設への入所（1/24～）
入所や通所に要する費用については、原則として「免除」
〈福祉事務所〉
・児童福祉施設（保育所・昼間里親・助産施設・母子寮）
・老人福祉施設（特別養護老人ホーム等）
・身体障害者更生援護施設等（肢体不自由者更生施設等）
・精神薄弱援護施設（精神薄弱者更生施設等）
〈児童相談所〉
・児童福祉施設（養護施設、乳児院、精神薄弱児施設等）
3/15現在
保育所 72名受入（決定済）
老人ホーム 3名受入（決定済）

(6) 被災した老人ホームへの救援物資の搬送（神戸市社会福祉協議会と協力）
（職員1名、民間社会福祉施設1名派遣）
1/26 神戸市へ（米、飲料水、下着等
ライトバン1台分）
(7) 被災した老人ホームへの民間施設の介護職員の派遣（神戸市）
2/6～2/10 4名／日（4泊5日を1クー
ルとして対応）
＊1クールごとに民生局職員1名が現
地同行し連絡調整を対応
2/10～2/18 5名／日
2/18～3/2 6名／日 （延べ160名派遣）
(8) 被災に係る福祉施設への民間施設の介護職員の派遣（芦屋市、富田林市）
2/28～3/3 8名／日 （延べ32名派遣）
(9) 被災地の身体に障害のある市民への車椅子等の搬送
1/27 神戸市へ 60台 （職員5名派遣）
2/4 神戸市へ 29台
（他 収尿器31個等）
なお、市民の方からの提供受付を開始（1/27～市役所、各福祉事務所）
(10) 被災された知的障害者の受入に伴う診療（1/26）
児童福祉センター医師・保健婦による対応（於 ホテルニュー日昇）
(11) 被災地の福祉施設への支援物資の受付（2/1～市役所、各福祉事務所）
(12) 高齢福祉施設に対する入浴車の提供等
移動入浴車「毎日ふれあい号」（＊提供者 大原記念病院）（職員2名派遣）
神戸市東灘区の老人ホームへ2/1～3月末まで提供及び支援物資の提供
(13) 児童精神科医の派遣（児童福祉センター）
2/1、8、10、14、15 1名／日 派遣
（神戸市児童相談所へ）（職員延べ5名）
(14) 被災地の福祉事務所業務及び関連業務の応援にかかる職員派遣（神戸市へ）
2/5～2/28 10名／日派遣（1ローテーション3泊4日）
2/28～3/24 5名／日派遣（1ローテーション4泊5日、土日除く）
（実人員80名、延べ310名）
（3/16現在延べ375名）

9 義援金・救援物資関係〈市民局、区役所・支所〉

(1) 被災都市への義援金の受付（1/19～）
市役所（広聴振興課）、各区役所・支所（地域振興室）
＊日赤京都府支部、京都府共同募金会との協力
(2) 救援物資の受付・搬送（1/24～）
＊市内の収集作業について建設局の協力
市役所、各区役所・支所
1/27 芦屋市へ救援物資を搬送（4トントラック1台分）
・防水シート 50枚
・紙おむつ 段ボール箱 48箱
・毛布・布団類段ボール箱 38箱
・ティッシュペーパー
段ボール箱 18箱
・衣料類 段ボール箱 11箱
・その他 段ボール箱 15箱
2/1 芦屋市へ救援物資を搬送（4トントラック1台分）
・衣料類 段ボール箱 111箱
・タオル類 段ボール箱 91箱
・紙おむつ 段ボール箱 44箱
・毛布・布団類段ボール箱 38箱
・車椅子 17台
・その他 段ボール箱 19箱
2/10 芦屋市へ救援物資を搬送（4トントラック1台分）
・衣料類 段ボール箱 106箱
・毛布・布団類段ボール箱 48箱
・紙おむつ 段ボール箱 29箱
・タオル類 段ボール箱 28箱
・保存食料 段ボール箱 20箱
・その他 段ボール箱 69箱
3/15 芦屋市へ救援物資を搬送（4トントラック1台分）
・衣料類 段ボール箱 34箱
・毛布・布団類段ボール箱 10箱
・紙おむつ 段ボール箱 5箱
・食器類 段ボール箱 77箱
・ゴミ袋 段ボール箱 40箱

・その他　段ボール箱　18箱
（3/16現在延べ4名派遣）

10　文化観光関係〈文化観光局〉

(1)　動物飼料の搬送
1/20　文化観光局から神戸市王子動物園へ動物飼料（野菜・果物等）2トン搬送

(2)　宇多野ユースホステルにおいて被災者の一時受入及び救援ボランティアの受入
3/16現在　10件17名受入（実績）

(3)　旅館・ホテル業界に対する被災者受入要請及び各種団体への義援金の要請

(4)　「京響チャリティーコンサート」の開催
2/20　京都会館第1ホール
2/28　売上金額等7、345、000円を義援金として神戸市に薦田助役が持参

11　建設・土木関係

◎主な集計
職員：延べ830名　車輛：延べ107台　派遣

〈建設局〉

(1)　道路上障害物除去作業等支援（神戸市）
2/1～2/8　ダンプ延べ6台、道路パトロールカー延べ9台　職員延べ60名派遣
2/8～2/23　ダンプ延べ24台、作業車延べ24台、連絡車延べ12台　職員延べ240名派遣
3/6～　2トンダンプ延べ16台、作業車延べ8台、連絡車延べ8台　職員延べ96名派遣

(2)　阪神高速道路公団損壊箇所復旧計画策定業務（阪神高速道路公団災害対策本部）
1/30～2/12　土木技術職員1名派遣　（延べ14名）

〈建設局・都市計画局・都市整備局〉

公共土木施設災害箇所査定資料作成業務（神戸市）
土木技術職員12名（建設局10名、都市計画局1名、都市整備局1名）派遣
2/10～3/20の間　現地土木事務所にて復旧に必要な各種資料作成を行う　（3/16現在　延べ420名）

12　その他支援

(1)　市民問い合わせ、相談電話（☎222―4119）の開設（1/24～）
3/16現在　885件受付　〈総務局〉

(2)　中央卸売市場第一市場休場日の開場　〈経済局〉
1/25（水）の休場日を取り止め、産地その他関係機関に第一市場への出荷を要請し、支援及び流通物資の確保

(3)　「近畿・中国・四国ブロック対策本部現地窓口」の設置　〈各　局〉
1/27～2/12　職員2名／日　派遣　各局職員を交替（3日間ごと）
2/13～　職員1名／日　派遣　各局職員を交替（3日間ごと）　（延べ50名）

(4)　家屋被災状況調査業務（神戸市）
〈理財局、市民局、区役所・支所〉
1/29～2/3　延べ職員128名派遣

(5)　り災証明発行の発行業務等に従事する職員の派遣（神戸市）　〈各　局〉
2/6～2/10　延べ50名派遣

(6)　自転車の提供（神戸市）
〈都市計画局〉
2/14　京都市が撤去・保管した引き取り手のない放置自転車210台を神戸市へ搬送
（＊京都府自転車軽自動車商協同組合及び京都大学サイクリング部有志のボランティアによる整備済）　職員3名派遣

(7)　チャリティコンサート開催〈総務局〉
〈シャンソンのヌーベルバーグ〉「エンゾ　エンゾコンサート」
2/26　京都会館第2ホール　（主催　京都市・関西日仏会館）
収益金2、656、500円は被災地への義援金とする

(8)　平成7年度京都市立芸術大学特例入試の実施　〈総務局〉
被災した受験生の大学受験の機会の確保を図るため、一般選抜試験とは別に受験を認める特例入試の実施
試験日　美術学部　3/28～3/30
音楽学部　第1次3/30、3/31
第2次4/3

(9)　京都市立看護短期大学の授業料等免除　〈衛生局〉
対象者　兵庫県南部地震で被害を受けた平成7年度入学生、在校生
内　容　入学料の全額免除、授業料の前期分の免除

(10)　避難所の管理に従事する職員の派遣（神戸市）　〈区役所〉
3/16～3/31の間　1名／日派遣
神戸市内の区役所における市災害見舞金、県災害義援金の受付処理等
＊京都府下市町村と合同

13　その他

(1)　神戸市に対し災害見舞金の交付
1/24　200万円（両都市の東京事務所間で受け渡し）

(2)　市長、市会議長と神戸市見舞い及び視察
1/26　市民の方からお預かりした義援金2、000万円
本市職員の義援金　572万円
市会議員の義援金　200万円

(3)　10都市交通局長会（京都市含む）から神戸市に対し災害見舞金の交付　〈交通局〉
1/25　180万円（神戸市を除く9都市×20万円）

(4)　各支援活動に伴う物資補給（消防局他）
注　集計は、3月16日正午現在の数値（一部数値については、直近把握分）

震災に関する京都市会の質疑・答弁の概要

平成7年2月、京都市議会

◎**質疑項目**　地震防災対策予算、地域防災計画の見直し、防災組織の強化、防災訓練の在り方、自主防災組織の育成、消防活動に必要な水利の確保、消防指令システムの整備、学校の果たす役割、医療体制の整備、橋梁の耐震性など

◎**答　弁**

・地震防災対策予算については、地域防災計画の見直しに向けた地震対策調査研究委託の初年度経費、木造住宅の実態を調査研究する経費及び地震防災啓発リーフレットの配布経費を新たに計上するとともに、備蓄物資の充実を図るための経費を増額するなど、当面する緊急課題について重点的に計上した。今後、更に地震防災対策の点検・見直しを進める中で、新たな事業が必要となれば補正予算を含めて必要な措置を講じていきたい。

・地域防災計画の見直しについては、今回の地震を契機に新たに震度7の大規模地震を想定したものとして、平成7年度から3カ年をかけて抜本的な見直しを行う。その取組としては、短期的には、職員の動員体制の強化、災害対策本部の体制充実、備蓄体制の整備拡充、市民への啓発などを早急に進め、中期的には、広域的防災体制の確立を検討し、災害時の情報収集、伝達体制の整備充実に努めていく。長期的には、活断層や土質など本市の地域特性等のデータの集積、被害想定の見直し、都市の安全化に関する研究など、地震対策の調査研究を行っていく。

・防災組織の強化については、全庁一丸となって災害対策本部を迅速かつ的確に機能させることが重要であり、併せて、被害を最小限に抑えるため、市民の防災意識の高揚を図ることも不可欠である。これらを踏まえ、防災組織の在り方を検討してきたが、24時間体制の下での職員の実動体制、指令センターを核とする高い情報収集能力、消防団や自主防災組織を通じ地域に密着した啓発活動の推進が可能な点などを総合的に判断し、消防局を防災行政の主管部局とし、その組織強化を図っていきたい。

・防災訓練については、市民の参加による初期消火活動、ライフライン応急復旧活動の訓練などを行うことにより、市民の防災意識の高揚を図ることを目的として実施してきたが、今後、その在り方を検討するとともに、今回の震災において自衛隊の果たす役割は大きなものがあると改めて認識したところであり、自衛隊の訓練参加についても検討していく。

・自主防災組織の育成については、現在、防災意識の向上、普及啓発、災害発生時の応急活動の在り方などの指導に当たっているが、地域ごとに、人命救助を第一にした対応ができるよう、更に組織の育成強化に努めたい。また、救出に必要な資器材を充実するとともに、災害発生時に行政の支援の手が及ぶまでの対応方法などについても研究していきたい。

・消防活動に必要な水利の確保については、水道消火栓、防火水槽、河川などで対応しているが、水道消火栓への依存度が高い現状を踏まえ、学校等の避難地域に耐震性貯水槽などを重点的、計画的に整備し、その多元化を図っていきたい。

・消防指令システムの整備については、現在のシステムは耐用年数も経過していることなどから、通信衛星を利用した消防車両動態管理・情報システムや大規模災害避難誘導システムなど高度な技術を取り入れたものに更新していきたい。

・学校の果たす役割については、大規模災害が発生した場合、学校に避難する人が多い現状を考えると、その果たす役割は非常に大きいので、校長を中心とした学校教員の協力体制を確立するとともに、耐震性の観点からも、老朽校舎を早期に改築していきたい。また、防災教育については、全児童、生徒に「安全ノート」を配布するなどの指導を行っているが、この機に、子どもたちが地震などの災害に対して的確に対処できるよう、指導の徹底を図っていく。

・医療体制の整備については、地域防災計画に基づき、医療班を市立の病院で4班、保健所で16班作る計画となっており、必要に応じて医師会の応援を求めることになっている。しかしながら、府医師会との災害時の医療・救護活動に関する協定については、医師会で確保すべき人員や出動条件、指揮命令系統、出動した医師が被災した場合の補償問題などについての検討課題があり、未だ締結していないので、早急に協定が締結できるよう協議を進めていく。また、医薬品の備蓄については、流通備蓄を検討するなど、総合的な補充・調達システムの整備に努めたい。

・橋梁の耐震性については、今回の地震の後、市内の橋梁を総点検した結果、大宮袴線橋の橋脚の一部に亀裂が見つかったものの、他に特別な被害、影響は出ていない。主要橋梁63橋のうち、地域防災計画で危険度が高いとされているのは13橋あるが、6橋については架け替えや補修等の対策を実施又は計画しており、残りの橋梁についても年次計画を立てて早急に対策を講じていきたい。市内の橋梁すべてについて今回のような大地震に耐えられる構造とするには経済的にも困難であり、今後は、老朽橋の架け替えや桁の補強などを行うことによって、少なくとも現時点の耐震設計基準で定めた強さを維持できる対応策を講じていきたい。

国の動きとマスコミからの提言

◎震災に関連する国の動き

・交付税と起債で災害復旧促進
（1/18　自治省）

・公営住宅への優先入居、全国に要請
（1/19　建設省）

被災者等の公営住宅入居希望があれば、資格要件不備でも優先入居を認めるよう要請。被災者の判断は、市町村の発行する「り災証明書」で行うこととした。

・全国の高速道を総点検へ
（1/19　建設省、道路公団）

・実践的利用へ地域防災計画見直し要請
（1/23　消防庁）

全国の自治体に、職員の自覚の問題、食糧等の備蓄管理の徹底、震災対策編の作成等実践的計画の策定を要請

・被災地住宅、2万3千戸確保～近隣自治体に更に要請
（1/23　建設省）

・防災基本計画、都市災害への対応を強化（震災教訓に見直し）（1/23　国土庁）

都市型災害にも的確に対応できる防災体制の整備を主眼に

・耐震性貯水槽の整備促進（大震災時の初期消火や飲料水確保）（1/26　消防庁）

震災で消火栓の破損により消火活動が遅れたことを重視し、7年度に11億5千万円の補助金を確保し、100トン型の初期消火、飲料水用の貯水槽等の整備を進めることを決定。

・個人所有の建物解体費を補助対象にすることを検討
（1/27　建設省）

・直接給水方式の普及に向けて水道管を強化
（1/27　厚生省）

・住宅、マンションの解体費用に国庫補助（震災復興策として）
（1/30　厚生、自治、大蔵省による合意）

・7年度も地方税減免し歳入欠陥債適用を検討（震災の特別立法で）
（1/30　自治省）

・被災地復興に住宅、都市整備公団を最大限利用する方針を決定（2/1　建設省）

・災害対策債、7年度発行も検討
（2/1　自治省）

・海水利用の消防システム推進（広域体制へ国際救助隊の積極活用）
（2/2　消防庁）

貯水槽、タンク車等の配備を進める他神戸市で「海水利用型消防水利システム」構想を推進。また、国際救助隊を国内災害にも積極活用できるようにする。

・避難、救援に十分な道路幅の確保を
（2/2　建設省）

・震災時に活用できる医師、看護婦を育成
（2/7　厚生省）

・「斜面判定士」制度を創設（緊急土砂災害対策として）
（2/10　建設省）

・復旧費は8千億円強に（震災対策の2次補正予算案）
（2/10　大蔵省）

・消防施設も激甚並み補助率を（震災復旧で要望）
（2/14　消防庁）

震災対策の2次補正予算で、耐震貯水槽等の消防施設補助金の補助率（3分の1）を激甚災害指定事業並みに引き上げるよう大蔵省に要望。

同補助金には震災復旧に対応した補助率アップの制度がなく、激甚並みの2分の1から10分の9の範囲へのかさ上げが趣旨。

・文化財修理費の補助率をかさ上げ要望
（2/14　文化庁）

震災で被害を受けた国指定文化財の修理費の国庫補助率を70％程度にかさ上げすることを大蔵省に要望。

・大災害の通報、市町村と直通（都道府県経由を改正）
（2/15　自治省）

大災害発生時に被災地市町村が都道府県を経由せず、直接電話や衛生通信ネットワークを通じて、状況通報するよう通知した。

・大災害に備え緊急消防救助隊創設
（2/23　消防庁）

大災害の初期消火、救助活動や災害情報の収集伝達に関し、レスキュー隊や救急専門医ら千人規模の「緊急消防救助隊」を都道府県ごとに設置する他、衛星通信による「映像伝送システム緊急整備事業」を推進する方針を決定。

◎震災に伴うマスコミからの提言（抜粋）

1　コミュニティ等

・コミュニティ機能が活動を左右

オフィス街や住民の高齢化が進んでいた地域では、コミュニティ機能が低下しており、それが地域ぐるみの防災活動の妨げになっている（自治省）との見方もある。
（1/28　日経）

・ボランティア支援の輪を広げる

大事なことは、ボランティアをいかに組織化し、有効に活用できるかだ。わが国のボランティア活動は、欧米ほどの広がりを持たない。貴重な体験を積み、今後の災害復旧に生かすためにも、もっと積極的にボランティアを受け入れてもらいたい。
（1/22　読売）

・高齢者対策に不備

高齢者向けの防災マニュアルの必要性を痛感した。

「タンスの上に物を置かない」「窓ガラスをテープで補強する」ありきたりな内容かもしれないが、「いざという時の心構えになる」と。
（1/25　読売）

2　都市づくり

・避難場所への提言

高架下を通過しないですむように、あるいはできるだけ近距離の避難路を指定するように、行政は不断の努力をしなければならない。
（1/24　産経）

・広域医療戦略を

未曾有の都市型災害である。国の対策

本部が医療面を総括指揮し、連絡・調整するシステムを作らない限り、長期にわたる効率のよい広域医療戦略はありえない。一刻も早い体制の建て直しが望まれる。（1/24 読売）

・事後の被災者の安全確保を

特に兵庫県南部地震のような直下型地震は事前に防ぐことが難しく、むしろ地震発生後の被災者の安全確保などソフト面のオペレーションがしっかり整備されているかどうかで被害の程度に差が出てくる。（1/23 日経）

・防災計画の見直しの手法

計画の見直しに当たっては、住民との関係をもっと密接なものにする必要がある。防災計画自体を知っている住民が少ない。計画づくりに積極的な参加を求め、防災意識の向上につなげたい。（1/23 朝日）

・住宅のスプリンクラー

住宅の自動消火装置を普及させるなど、事前にできる対策は何でも講じておくぐらいの気構えが必要だ。（1/29 朝日）

・安全で快適なモデル都市づくり

神戸を防災・耐震のモデル都市に再開発することは、関西圏活性化への起爆剤となるといえないだろうか。

そのためには巨額な資本が必要であり、一自治体の手におえる仕事ではない。だが再度どこかで同じような直下型地震が起きることを考えると、神戸を安全で快適なモデル都市に造りかえることはむだな投資ではないはずだ。（1/21 読売）

・地質調査とシミュレーション

この震災対策策定に当たっては、地質や地上の建築物などの基礎調査を実施、その地域で予想される地震被害をシミュレーションする必要がある。（1/24 読売）

3 情報

・住民への情報提供

どこへ行けば救護を受けられるかといった細かい情報を加え、無料の自動応答電話とファックスを使って、分刻みで市民に流す。（1/24 朝日）

・行政からの情報提供

行政の対応の内容や生活情報を周知させることだ。当面の日常生活に必要な情報はもちろん、被災者一人ひとりに生活再建の意欲を取り戻してもらうためには行政がどんな支援をするのかを、具体的に示すことが重要だ。（1/22 読売）

・緊急情報の一元化

①通信衛星利用のマイクロ回線網の整備・拡充、②自衛隊、警察、消防が入手した緊急情報の一元化――などハード、ソフト両面からの再検討に着手した。このほか、電機業界などでは、災害に強い通信機器の開発を進める機運が高まっている。（1/25 産経）

・通信網の危機管理

今回の地震を教訓に、郵政省は「予備電源の見直しなど、電話通信網の危機管理について抜本的に見直す必要がある」としているが、無線など他の通信網の早急な整備や、企業内などの専用回線の増設といった強化策も同時に求められている。（1/20 日経）

・全国共通無線波

奈良県から応援に来ていた救急隊員は「うちの救急車は全国共通の無線がない。病院を探すのに、直接行って確かめなければならなかった」と打ち明ける。

大災害時の電波をめぐる全国共通無線の整備は以前から懸案となっている。消防庁や警察庁、防衛庁など関係各省庁が常時、電波枠を数チャンネル分ずつ確保しているが、今回のように、同時多発で火事や急患が発生した場合、チャンネル数が極端に不足する。（1/23 毎日）

4 消防力

・重機が必要

重機不足。ビル倒壊や土砂崩れの現場では、パワーショベルなどの重機が威力を発揮する。（1/31 読売）

・ガレキが進路妨害

火の回りが早い老朽家屋の密集地、漏れたガスへの引火、行く手を阻むガレキの山、水道管の破裂による水不足。

次々と燃え上がる火災に、消防力はあまりに無力だった。（1/21 読売）

・無線の輻そう

携帯無線で神戸市消防本部に応援を求めた。だが、「市内全域で火災。応援はできない」

消防本部の無線には、一斉に出動した市内121の消防隊からの連絡が殺到していた。各隊の周波数が同じで混線がひどく、役に立たなかった。（1/25 朝日）

・水源が不足

ポンプ車で駆けつけた。だが、消火栓からは水は出なかった。近くの40トン入り防火貯水槽から水をくみ上げたが、約40分で使い切った。火の勢いは止まらなかった。（1/25 朝日）

・ヘリコプターの活用方策

人命救助や消火にはヘリコプターの活用が極めて重要になった。例えば、山火事の際に消火弾を上空から落として消火するように、火災の中心の災上部分に上空からヘリコプターで消火弾を落として鎮火させるということを真剣に検討すべきである。

夜間、テレビ局のヘリコプターが火災の上空を舞っているのに、政府や防衛庁のヘリコプターが1機も見当たらない。（1/23 産経）

・被災地上空の飛行制限

マスコミの取材よりも、水や食料の供給や、災害情報収集・消火用水散布などのためのルートとしての航空管理を統括することが重要。（1/21 朝日）

阪神大震災の被災地復興のために、海外からの支援の申し入れが続いている。2月9日までに支援を申し入れたのは、70カ国・地域と3国際機関。政府はこれまでに35カ国の申し入れを受け入れた。

援助の内容は様々で、国の特産品を贈ったり被災地の子供たちを自国に招待するなど、その国ならではの工夫がうかがえる。「特産のマグロ缶詰」(チュニジア)、「毛布と手袋」(モンゴル)、「紅茶を3トン」(スリランカ)、「被災した子供たちを招待したい」(チェコ) など様々な申し出があった。

支援申し入れ国	日付	申し入れ支援内容	備考
ハンガリー	1/18	救助隊、救助犬の派遣	
アルメニア	1/19	援助する用意がある	
ギリシャ	1/19	外科医(4名)の派遣	
WHO	1/19	できることがあれが協力する用意がある	
バチカン市国	1/19	援助する用意があるので、日本側のニーズを知らせて欲しい	
チュニジア	1/31	救援物資(マグロの缶詰)	救援物資の受入れ
スロベニア	1/19	地震工学専門家の派遣	
	1/31	日本赤十字社を通じた救援物資(ミネラルウォーター、衣類、毛布)の供与	救援物資の受入れ
カザフスタン	1/20	援助を行う用意がある	
スロバキア	1/20	捜索犬、捜索要員の派遣、医療チームの派遣	
オランダ	1/20	捜索犬、要員の派遣	
	1/27	義援金15万ギルダー	義援金の受入れ
バングラデシュ	1/20	医療チームの派遣等支援する用意がある	
フィンランド	1/20	ノキア社の携帯電話(300台)の贈与	携帯電話の受入れ
カンボジア	1/20	シアヌーク国王より義援金2万ドル、その後カンボジア赤十字より1,000ドルの義援金	義援金の受入れ
	2/4	(輸送費を日本側が負担すれば)1万立方メートルの木材供与の用意がある	
パキスタン	1/20	できることがあれば是非提供したい	
EU	1/20	援助する用意があるので日本側のニーズを知らせて欲しい	
ブルネイ	1/20	現場のニーズに応じ、救援物資を送付したい	ミネラルウォーターのペットボトル、衣料、缶詰を兵庫県、神戸市に供与
チリ	1/20	消防団の救援隊(20名程度)の派遣	
台湾	1/20	駐日台北経済文化代表事務所より義援金(2,000万円)	神戸市に手交
	1/26	亜関係協会・交流協会を通じて物資援助の用意がある	
スペイン	1/21	捜索犬の派遣	
ルーマニア	1/21	救援隊の派遣、毛布の提供、仮設住宅及び住宅設営のための人員派遣	救援物資(毛布)の受入れ
ヨルダン	1/21	寝袋(2,000個)、テント(1人用・1,000、6人用・300)の供与	受入れ
モンゴル	1/21	毛布(2,000枚)、手袋(500組)の供与	受入れ
ミャンマー	1/22	援助し得ることがあれば是非援助したいのでニーズを知らせて欲しい	
南アフリカ	1/23	捜索犬及び要員派遣の用意がある	
エジプト	1/23	必要ないかなる支援も行う用意がある	
	1/27	救援物資(男・女性、子供用衣服)の供与	救援物資の受入れ
ベラルーシ	1/23	いかなる支援の要請にも応える用意がある	
インド	1/23	支援できることがあれば、喜んで支援する用意がある	
	1/31	1億円相当の救援物資の供与	救援物資の受入れ
フィジー	1/23	支援できることがあれば、喜んで支援したい	
オーストリア	1/24	支援する用意があるので、ニーズを知らせて欲しい	
イエメン	1/24	医療チームの派遣	
トルコ	1/24	支援する用意があるので、ニーズを教えて欲しい	
イラン	1/24	地震専門家の派遣	
カタール	1/24	食料、衣類の供与等できる限り支援する用意がある	
キューバ	1/24	医師、看護婦の派遣、建設作業員の提供等	
コスタリカ	1/24	移民を希望する人については喜んで受け入れることとしたい	
	1/27	国家緊急委員会地震専門家(2人)の派遣	
ブラジル	1/24	日本側が必要とする支援を行う用意がある	
スウェーデン	1/24	国家救難庁関係者の派遣	国家救難庁関係者来日
エルサルバドル	1/25	救援隊の派遣	
グルジア	1/25	何か支援できることがあれば知らせて欲しい	
ソロモン	1/25	人的援助を提供する用意がある	
ポーランド	1/25	医師派遣の用意がある	
朝鮮民主主義人民共和国	1/26	北朝鮮赤十字会より義援金(2,000万円)	日本赤十字社に手交
スリランカ	1/26	紅茶(3,000kg)の寄贈	紅茶の受入れ
バヌアツ	1/26	義援金(100万ヴァツ)	義援金受入れ
インドネシア	1/28	復興に役立てるための合板を提供する用意がある	合板受入れ(詳細調整中)
マレーシア	1/28	救援隊の派遣	
	2/1	可能な限りいかなる支援も提供する用意がある	
ジブチ	1/30	大統領より義援金(1万ドル)	
新ユーゴ	1/31	医師、看護婦各10名からなる救援チームの派遣	
トンガ	2/6	義援金(250万円)	義援金の受入れ
ベルギー	2/7	義援金(200万ベルギー・フラン)	義援金の受入れ

海外からの支援

申し入れ順、2月9日現在　外務省調べ

支援申し入れ国	日付	申し入れ支援内容	備考
米国	1/17	地震専門家の派遣 在日米軍による物資提供等	派遣受入れを決定。毛布(合計59,500枚)、飲料水(142,000リットル)の提供受入れを決定。テント(20張)、テント設置の為の入員(74名)派遣の受入れ。防水シート(175巻)、更に1,500巻の供与受入れ。
スイス	1/17	緊急援助隊50～60名、捜索犬25頭の派遣	隊員(26名)、捜索犬(12頭)の派遣受入れを決定。1/19入国、捜索活動開始。9遺体(男5、女4)発見。23日帰国。
	1/25	今後も日本が必要とする支援を行う用意がある	
フランス	1/17	日本側が希望するなら災害救助特別隊60人派遣と資材6トン送付	災害救助特別隊(60名)の受入れを決定。21日入国、捜索活動開始。2遺体(男女1)発見、25日帰国
ロシア	1/17	ハバロフスクからの緊急援助隊の派遣	
	1/25	支援物資(毛布、防寒着、シーツ、使い捨て食器等)の供与	物資供与受入れ
カナダ	1/17	何らかの援助をする用意があるので、日本側のニーズを知らせて欲しい	
	1/20	地震専門家の派遣	派遣受入れ
	1/24	50万加ドル相当の救援物資(テント、補助器具)の供与	物資供与受入れ
ドイツ	1/17	何らかの援助をする用意があるので、日本側のニーズを知らせて欲しい	
	1/18	連邦技術援助機構を数十名規模で派遣する用意がある	
	1/23	50万マルク相当の救援物資(寝袋、防寒着等)の供与	物資供与受入れ
イスラエル	1/17	軍の特別救助チームの派遣	
イタリア	1/18	何らかの援助をする用意があるので、日本側のニーズを知らせて欲しい	
	1/27	地震専門家(地質学、建築、地球物理学の3名)の派遣 2億5,000万リラ相当の簡易発電機(200個)の供与	簡易発電機供与受入れ
イギリス	1/18	何らかの援助をする用意があるので、日本側のニーズを知らせて欲しい	毛布(18,150枚)、ビニールシート(35巻)ポリタンク(496個)、プラスティック食器(500個)の受入れ
	1/20	国際救助隊(NGO)の派遣、災害対策用資材(毛布、テント等)の提供、ボランティア医療チームの派遣、不足物資の調達	救急用品(包帯、ガーゼ等)、衛生用品等3トンの受入れ
シンガポール	1/18	緊急援助隊の派遣	
韓国	1/18	医療・復旧のための要員・設備派遣	
		生活必需品(ミネラルウォーター、インスタントラーメン、毛布、炊事セット等)100トンの提供、医療チームの派遣、復旧作業への協力	生活必需品の受入れ
		支援物資(菓子類、缶詰、防寒服等)約200トンの供与	食料、防寒着200トンの受入れ
		大韓赤十字社から義援金(5万ドル)	支援物資の受け入れ 日本赤十字社に送金
メキシコ	1/18	支援のための事前調査団(自然災害専門家)の派遣	支援のための事前調査団訪日
	1/26	支援物資(缶詰、粉ミルク、マット等、更にシーツ、紙オムツ追加)の供与	救援物資の受入れ
国連	1/18	日本からの要請があれば対応する用意がある	
中国	1/18	中国紅十字社の医療活動を含めなんでも協力する用意があるので、日本側のニーズを知らせてほしい	日本赤十字社の手交、食品の受入れ 物資の受入れ
		地震専門家の派遣	
		中国紅十字社より義援金(10万ドル)、人民元20万元相当の保存可能な食品(ビスケット等)の供与	
		300万元相当の緊急援助物資(下着、缶詰、ビスケット、即席麺等)の供与	
ノルウェー	1/18	日本からの要請があれば対応する用意がある	
フィリピン	1/18	被災者に対して100万ペソの支援及び神戸地区在住のフィリピン人に対して100万ペソの支援を行う	
	1/19	金銭的支援に加え救援チーム50名の派遣、重器材の提供、食料の供与	
オーストラリア	1/18	できることがあれば全面的に協力する用意がある	ミネラルウォーター200,000リットルを被災地に供与
ニュージーランド	1/18	必需品の調達や復興のために役立つことがあれば喜んで協力したい	
	1/20	援助物資(毛布、かぼちゃ)の提供	援助物費(毛布)の受入れ
チェコ	1/18	できることがあれば喜んで援助したい	
	1/28	被災した子供たちをチェコ政府経費負担で招待したい	
アルジェリア	1/18	災害援助チーム30名の派遣、物資供与	
アイルランド	1/18	できることがあれば協力する用意がある	
	1/31	義援金(5万アイルランド・ポンド)	義援金の受入れ
タイ	1/18	何らかの援助をする意用があるので、日本側のニーズを知らせて欲しい (その後、医療チーム派遣の打診あり)	毛布、インスタントラーメン、もち米菓子、医療チームの受入れ
マダガスカル	1/18	できることがあれば協力する用意がある	

構造物の倒壊を検証する

阪神・淡路大震災による犠牲者は5、502人にのぼる。そして、このうちの4、500人以上、実に犠牲者の90％以上が、木造家屋の倒壊による圧死者であった。さらには、鉄筋コンクリート造や鉄骨造の、いわゆる耐震・耐火構造と言われる建築物も多数被災しており、予想外の建物被害が今回の震災の大きな要因であったと言っても過言ではない。

耐震性に優れているはずの日本の住宅や関東大震災クラスの地震でも崩れないと言われていた高速道路が、なぜ、これほどまでも無残に破壊されたのだろうか。

根源にある大きな揺れ

今回の地震被害を検証していく場合、無視できないのは揺れの大きさである。被害の大きかった神戸市中央区や西宮市の海岸寄りでは800ガル前後の大きな加速度が記録されており、その他の神戸市内でもほぼ500～600ガルの値が観測されている。

単純には、93年の釧路沖地震の919ガルの方が大きいが、それを除く釧路市内では300～400ガルであったので、これと比較すれば、ほぼ2倍の強さで揺すぶられたことになる。

そのような戦後最大の地震動が大都市の直下で起こったという事実が、被害の大きさの根源にあることは否めない事実である。

木造建物の倒壊を考える

全壊した家屋は約10万60棟であるが、そのほとんどは木造家屋であった。そして、先述のとおり、犠牲者の90％以上がこれら木造家屋の倒壊による圧死者であった。ほとんどの犠牲者がたんすなどの家具類や天井の梁（はり）の下敷きになって亡くなったのである。

「木造家屋はどうして壊れたのか」。当然、壊れた建物には壊れた理由が存在する。その要因を順番に挙げていくと、まず「古かったこと」が挙げられる。例えば、壊滅的な被害を受けた酒蔵などは、「古い」という点において、最悪の条件を備えていたと言えるし、その他の古い木造家屋も、ことごとく壊れてしまったのである。

また、壊れた木造家屋の特徴として「地震に対する抵抗力の欠如」が挙げられる。壊れた住宅をみると、ほとんど〝筋交い〟が入っていなかったという事実が認められた。さらに、1階部分に広いリビングを取ったり、南向けに大きな窓があったりというように1階の壁が少なく、不整形で構造的にアンバランスなものに被害が集中していた。泥土をのせた瓦屋根を持つ屋根の重い建物も数多く壊れてしまったことは周知のとおりである。

在来工法は危ないか？

以上のような建物の被害状況の中で、倒壊することもなく比較的被害の少なかった建物として、2×4工法による住宅やプレハブ住宅が注目されている。そしてそれと同時に、在来工法による木造住宅は地震に弱い、というイメージが定着しつつある。しかし、本当にそうなのだろうか？

もちろん、2×4工法による住宅やプレハブ住宅が今回の地震に対しての耐性を持っていたというのは、まぎれもない事実である。しかし、これらの住宅が壊れなかった最大の原因として、これらの住宅には築後数十年を経過したものなどはほとんどなく、「新しい」ものが多かったという調査結果が挙げられていることや、在来工法による木造住宅であっても現行の耐震化の基準を守ったものは破損していないという事実を見れば、「新しい住宅」→「耐震化基準に適合」→「地震に強い」という図式が成り立つのみであって、「在来工法による木造住宅」→「地震に弱い」という図式には結びつかないのである。

すなわち、在来工法による木造住宅であっても、建築の際には現行の耐震化基準を満足することに留意し、さらに壁等のバランスを考えた設計と、しっかりとした施工管理を行うことで、プレハブ住宅等と同程度の耐震性を備えることができるのである。また、既存の木造住宅についても、「筋交いを入れて壁の耐力を付ける」「柱や梁などの接合部を金具やボルトで堅固にする」「屋根の軽量化を図る」などの方法により耐震性を高めることができるという点において、今回の地震被害の状況だけを見て、日本の伝統的工法を否定するのは早計であると思われるのである。

「既存不適格」をどうするか？

今回の震災では、鉄筋コンクリート造や鉄骨造の中高層マンションやオフィスビルも数多く被災した。その倒壊建物の構造に着目した場合、次の大きな特徴点が浮かび上がってくる。まず、1階部分をピロティにしているなど、1階部分に壁の少ない建物が多く崩壊しているということである。次に、神戸市役所2号館のように、途中階が座屈した建物が多く見受けられたが、これには今回の地震の縦揺れの垂直加速度の大きさと、60m以下の建築物には縦揺れの耐震基準が設けられていないという問題点が深く関わっているように思われる。すなわち、突き

上げるような縦揺れで一担伸び上がった中高層建物が元に戻るとき、耐力が低く変形性能の乏しい階をもった建物では、その弱い部分が破壊されてしまったと推測されるのである。

このように、倒壊した中高層建物には共通した構造的特徴が認められたが、やはり木造住宅の場合と同じく、古いものに被害が多く見られ、最近建築された建物には、被害はほとんど認められていないのである。

関東大震災以降、日本の建築物には耐震性が要求され、昭和25年（1950）に建築基準法が制定された。その後、特に、昭和46年（1971）と56年（1981）の改正建築基準法の施行により、耐震性は強化されてきている。そして、

今回被害を受けた中高層建物の大半が、耐震基準が厳しくなる前、すなわち81年の建築基準法施行令改正前に建てられた建物であると報告されている。

周知のとおり、消防法には、改正点が既存の建物にも適用される「そ及規定」があるが、建築基準法にはこの規定がない。よって、法改正前に建てられたものについては、「既存不適格」という扱いになる。統計を見ると、今回の地震で壊れた中高層建物の80％がこの「既存不適格」建物であったことが判明している。

そういった意味からも今後、この「既存不適格」建物の改修をどのように進めていくのかが、大きな課題と言えるのである。

安全神話はなぜ崩れたか

ちょうど1年前の1994年1月17日に、米国ロサンゼルス地域を襲ったノースリッジ地震の被災地を視察調査した日本の専門家たちは、高速道路の橋脚が押し潰されている状況を目の当たりにしながらも、「日本の高速道路は大丈夫」と言い切っていた。しかし、阪神高速道路神戸線の倒壊は、こうした「安全神話」を一瞬にして打ち砕いてしまった。

神戸市東灘区の神戸線倒壊現場は、一本柱の橋脚計18基が中央や根元付近から折れ、約635mにわたって高架が横倒しになった。この一本柱橋脚は、古い設計の鉄筋コンクリート製で、補強工事の対象になりながらも、手つかずの状態だったことが、その後、明らかとなっている。

延長25・4km、西宮市の名神高速道路西宮インターと神戸市須磨区を区間とする神戸線の高架道路は、計971基の橋脚で支えられている。このうち鋼鉄製は102基。残りは鉄筋コンクリート製で、さらにそのうちの737基は、一本柱タイプであった。

こうした高架橋の建築・設計基準は建設省が定めているが、これまでに何度かの基準強化が繰り返されてきた。大きな節目の一つは、1971年の「道路橋の耐震設計指針」であった。きっかけは、64年に発生した新潟地震で、軟弱地盤で起きる液状化への対策が高架にも生かされたというものであった。

続いて80年には、高速道路が崩れたサンフランシスコ地震の調査結果をもとに、さらに耐震設計指針が強化された。主な内容は、鉄筋コンクリート製一本柱の中に組み込まれる縦の鉄筋の数を増やしたり、この鉄筋を束ねる帯鉄筋の直径を「6㎜以上」から「13㎜以上」と太くするなど、構造上の粘りを強化する対策であった。

ところが、神戸線の着工は63年で、70年2月までに全線が開通しており、こうした指針の強化が行われる以前の古い設計基準で建築されていたのである。ただ、阪神道路公団も、古い設計区間については91年にかけて点検作業を実施し、補強工事の方針を打ち出していた。それは、一本柱の橋脚に鋼板を巻き付ける方法である。

補強の対象は、神戸線の一本柱737基のうちの57基で、97年度末を目標に西端の須磨区側から補修に着手したのである。しかし、これまでに補強を完了したのは、たったの5基のみで、倒壊現場も含め大半が未着手であった。阪神高速道路池田線や環状線などの大阪地区では、補強対象とした43基のうち39基の工事を終えていたが、神戸線は高架下に国道が並行しており工事が進んでいなかったのである。

耐震基準の再検討を

今回の地震は、都市構造物の耐震基準そのものに疑問を抱かせる結果となった。福井地震を契機とした我が国の耐震思想が、今、根底から見直しを迫られているのである。今回の揺れは、想定していた関東大地震を超えていたとはいえ、数十年にわたって築き上げてきた都市の構造物の耐震基準が意外にもろいものであったことを証明してしまった。

都市生活への新たな不安を取り除くのは、行政の大きな責任である。専門家の力を結集して、被害の科学的調査を急ぎ、調査の結果を一刻も早く、行政の施策として生かしていかなければならない。

神戸市・京都市消防職員寄稿――大震災との闘い――

ファインダーが語る わが神戸の街

神戸市消防局 予防部予防課「雪」編集部 中地弘幸

平成7年1月17日午前5時46分、「ドドドドォーン」という地響きに続き、グラグラと横揺れが10数秒間続いた。そこらじゅうでガシャ、ガシャとものの壊れる音が聞こえ、突然照明が消えた。家族と別の部屋で寝ていた私は、妻や子供たちが寝ている部屋へ行こうとしたが立ち上がれない。

「みんな大丈夫か！」と大声を上げてなんとか這ってたどり着いた。家族の声が聞けたので一安心。今度は、懐中電灯を探そうとするが、本棚や食器棚、タンスに収納していたものが部屋中に散乱して見当たらない。かろうじてライターを見つけ火をつけると、おびえきった子供たちの顔が映し出された。揺れが治まったかと思うや、再び余震が襲ってくる。「パパ大丈夫？」という子供たちの問いに、「パパが付いているから大丈夫」と応えたものの、心中穏やかならぬものがあった。生まれてこのかた、こんなに大きな地震に遭遇した経験がない。

「住んでいる建物は大丈夫だろうか？」「避難する必要はあるのか？」さまざまな試行錯誤が続いた。窓から外を見ると特に異常はなさそうだ。床に落ちた置き時計は6時を指している。タンスや食器棚などは倒れていない。後片づけは大変だが、何とかなりそうだ。落ち着いたところで、電話の受話器をあげたが、発信音すら聞こえない。しばらく繰り返しているうちに「プーン」という音が聞こえてきた。早速ダイヤルするが、今度は呼び出し音が聞こえない。こんな状態がしばらく続いた。

今にして思えば、家族のそばにいて身内の安全が確認できた私は幸せなほうだ。地震発生直後から現場活動をしている職員は、家族の安否すら知らないままでいるのだから、職務の性格という言葉では片づけられないものを感じる。

地下鉄の駅まで行くと、構内でアナウンスが流れている。「建物に倒壊危険があるので、直ちに建物から避難してください」。

いつもの交通機関が使えないとなると次はタクシーだが、タクシー乗り場に車は止まっていない。しからばマイカーだが……。結局、家と駅とを3往復して、マイカーを止めている駐車場に行くと、車のボンネットや屋根に黒いすすのようなほこりがついていた。そういえば火災現場で嗅ぐにおいに似ているが、この付近で火災らしきものは発生していない。

車を走らせながら考えたことは、どの道路を選択するかである。地震の規模からすれば、有料道路はストップしているかもしれない。一般道にしよう。

車が長田区に近づいた途端、周りの様相が一変した。道路沿いの建物という建物が木造はもちろん、鉄筋コンクリート造の建物までが座屈している。場所によって被害がこうも違うものなのか。その上、道路のあちこちに亀裂が走っている。そして、幹線道路に出た途端、自分の目を疑った。

アスファルト道路が上下にうねり、そこかしこで陥没している。これが神戸の街なのか、まるで悪夢の中を通り過ぎているような錯覚に陥っているかのようだ。

さらに車を進めると、確かここにはあの建物が……といった光景が続く。そして最後に、市役所に到着して「アッ！」と開いた口がふさがらなかった。こともあろうに、市役所2号館の6階部分が座屈してしまっている。消防局はどうなっているのだろう。

3号館の3階に上がり部屋の中に入ると、本棚は倒れ、整然と並んでいた机がグシャグシャになっている。「これはひどい」。自分の家の中もひどかったが、ここはそれ以上だ。

その後、三々五々参集してきた同僚と事務所の片づけに追われていたが、そこへ飛び込んできたのがヘリからの災害情報収集の話だ。

早速、カメラ2台にフィルムを装填して、ヘリが待つ兵庫県消防学校（神戸市北区）に向かった。消防学校に到着すると、各都市から応援に来てくれたヘリが待機している。そのうちの名古屋市消防局のヘリに乗り込み、災害現場の上空で記録写真を撮り続けた。ファインダーを通すと実際よりも和らいで伝わるといわれるが、その分を差し引いても「この災害現場は凄まじい」の一言に尽きる。濛々と黒煙を上げて燃え盛る街区や、燃えるものがなくなっても青白い煙を上げる街区、火災という言葉では片づけられない。戦争は知らないが、映画で見る戦災に近いものを感じた。

その後は、さまざまな仕事に追われ、本来の担当である広報誌の発行は無理かのように思われた。「『雪』2月号は苦労してでも作れ」という予防課長の言葉をきっかけに、意欲的に写真を撮りまくったが、現場活動の写真はほとんど撮れな

かった。それでもどうにかこうにか発行までこぎつけ、今は特集号の編集に頭を痛めている。

そんな中で、災害現場で汗まみれになって風呂にも入れず、ただ黙々と活動する隊員の活動が、そして家族の安否を気づかいながらも、職務に専念しなければならない消防職員のことが、新聞やテレビの報道に表れない苛立たしさをなんとかしたいと思う。

2月号の割り付けのための写真を見ていると、写真に収まらなかった現場が頭をよぎる。

「神戸の街の復興は……」「被災した方々の復帰は……」防災を担当する者の一人として、また広報誌を担当する者として、二度と神戸で、いや日本でこんな惨事を繰り返してはならないと思う。

最後に、被災地の消防本部の一人として、京都市消防局をはじめとして応援してくださった消防本部の皆さまに感謝します。

人工島での被災体験

神戸市消防局　生田消防署主査
外西　勝

今までに感じたことのない恐怖を感じた。神戸の人工島、ポートアイランドにある高層住宅の13階の自宅で地震に遭遇した。

「ズズーン、ドーン」という、地響きのような轟音で目が覚めた。一瞬宙に浮いたような感覚の後、激しい揺れが襲ってきた。

二段ベッドの上段で寝ていた私は、すぐ起き上がろうとしたが、あまりの揺れの激しさに上体を起こすことさえできず、あ然と揺れに身を任せるしかなかった。

「地震だ」と一瞬思った。しかし、今発生している現象は、私が持っている地震の概念をはるかに超えていた。私にとって地震は、住居や勤務先で今までに何回か経験したことのある「あっ揺れてるな」という程度のものでしかなかった。轟音の後でもあり「ひょっとしたら戦争でも起こったのでは？」と思ったりもした。また、あまりの揺れの激しさに、住宅が倒壊し、このまま死ぬのかなという思いが脳裏をかすめた。

この間、隣の居間ではバターン、ドターンとタンスや棚が倒れ、ガチャーンとガラスが割れる音がする。私が寝ていた2段ベッドの下段には、だれも寝ていなかった。2段ベッドの隣のベッドに妻と、4歳と3歳になる娘がいっしょに寝ていたが、地震発生直後、4歳の娘が「やめてよ」と叫んだそうである。妻は「地震だよ」と言って、2人の娘とふとんをかぶったその直後、ベッドの棚に積んでおいた絵本が数冊落ちてきたそうである。

揺れがおさまり、ベッドから降り、妻と顔を見合わせる。「ごっつい地震やったなー」それ以外に言葉が見あたらなかった。家族4人にけががなく、ほっとした。

寝室の隣の居間は、タンスや棚、姿見、さらに台所から冷蔵庫が倒れ込み、倒壊物やガラスの破片で足の踏み場がない。そのうえ、金魚を飼っていた幅約60cmの水槽が倒れ、部屋中が水びたしであった。真っ暗な中で、金魚がピチャピチャと跳ねていた。

既に停電状態であった。こういう時にまず必要なのは懐中電灯と携帯ラジオである。しかし、懐中電灯は一応買ってはいたが非常時に使用したことはなく、今では子どもの遊び道具になっていた。暗がりの中で懐中電灯を探すようでは笑い話にもならない。また、大型のラジオもあったが電池は入っていなかった。暗闇の中、倒れた冷蔵庫や棚を乗り越え、ガラスの破片に気をつけながら移動し、電話の受話器を握ると通話音がしたので、勤務先に電話をしたが話中であった。とにかく情報をと思い、自動車のラジオで情報を得ることにした。玄関のほうへ行くと、靴箱が倒れていた。手さぐりで足に合う靴を履き、外に出た。林立する高層住宅は、各棟とも非常灯だけが点灯しており、住民のざわめく声が聞こえてくる。階段を1階までかけ降り、まず住んでいる住宅が傾いていないかを見たが、大丈夫のようである。まだ暗かったので、それ以上はわからなかった。そして、駐車場まで行き、車のラジオをつけると、地震の臨時ニュースを放送しており、神戸が震度6であることを知った。北の空を見ると、火災と思われる煙が、数カ所で認められた。

自宅に戻り、すぐに服を着替え、約5km離れた勤務先へ向かう。妻は「自動車は危険であるので自転車で行ったほうがいい」と言ったが、1秒でも早く出勤したい思いで、自動車で向かったのが間違いであった。住宅のあるポートアイランドの中央部から、外周道路へ出ると一面が水浸しになっていた。神戸市本土とポートアイランドを結ぶ神戸大橋のほうへ車を走らせると、橋に近づくにつれて水浸しはひどくなってきた。前方で10数台の車が立ち往生している。水浸しのひどさに驚きながら自宅へ引き返し、自転車に乗り換え職場へ向かった。自転車で水浸しの道路に入り、初めて道路がドロドロになっていることに気がついた。人工島の軟弱な地盤が地震により地中の水とともに地表に噴き出し、液状化していたのである。

ドロドロの中を自転車をかついで歩きながら、7、8年前に、NHKの伊藤和明氏が神戸での講演で「神戸で大地震があればポートアイランドは液状化でメチャメチャになる」と言っていたのを思い出した。神戸大橋までたどり着くと、橋のたもとでタクシーがフロントガラスの部分まで水没していた。橋を渡り、突堤付近の道路に出ると、いたるところで地割れが発生していた。国道2号線を西に走っていくと、阪神高速道路の橋脚が破損し、内側の鉄筋が飛び出しているのが見えた。歩道もあちこちで壊れており、途中自転車を押して行くと、高速道路の橋げたが下の歩道橋に落下していた。

勤務先の消防出張所に着いたのは、7時前であったと思う。出張所に着くと、ポンプ小隊と救急隊は、付近の生き埋め現場へ出動していた。残った特殊車隊と駆け付けた者でポンプ小隊を編成し、火災に備えながら情報収集に当たっていたが、近くの木造住宅密集地で「家屋倒壊による生き埋め多数あり」の駆け込み通報があり、連絡員1名を残し現場へ向かった。

1週間後に初めて一時帰宅許可が出て、ポートアイランドに戻ったが、そこは荒涼の地となっていた。躍進する神戸の象徴と宣伝された面影はどこにもなかった。新交通モノレールの車両は線路上に立ち往生したままである。道路は一面茶色の砂に覆われており、災害復旧のトラックが走るたびに、砂塵が舞い上がっている。世界有数のコンテナ基地を誇る港湾施設はずたずたに破壊され、波に洗われていた。わが住宅のほうに向かうと、給水車の前に長蛇の列ができていた。地震発生から20日たった今でも、ガス、水道はストップしたままであり、ガスについては復旧がいつになるのかさえも分からない状態が続いている。

地震で約5500人の死者、3600人の負傷者が出たにもかかわらず、幸いわが一家4人は無事であった。これは、住宅が倒壊しなかったことはもちろんであるが、寝室にタンスその他の倒壊物を置いていなかったことがまず大きい。寝室以外で被災することを考えると、タンス、棚等は、強固に固定する必要があるが、背の高いものは避けたほうが賢明であろう。

この拙稿は、「ポートアイランドに住む一市民としての被災体験を」との依頼により、地震発生からの体験を思い出すままに綴ったものであるが、最後に消防人として現在の心情を吐露することを、お許し願いたい。

消防出張所の責任者として部下を指揮し、また部下もいつもの2倍3倍の力を出し、まさにコンバット・ハイの状態で働いてくれた。私も数人の生き埋めになった要救助者を助け出した。持てる力を出し切ったという思いはある。しかし、神戸市長田区、兵庫区の一面焼け野原となった火災現場、ここで生き埋めになり、救出を待ちながら多くの人が焼死したことを思うと、消防組織の一員として名状しがたい虚無感に襲われてしまう。

消防人として未曾有の経験をした私たちがやるべきことは、神戸を日本一の安全都市につくりかえていくことしかないと思うのである。

空からの支援活動

警防部消防救助課　堀田潤一

1月17日朝の地震発生により布団より飛び起き、NHKのテレビニュースを見た。子供が「京都は震度5や、お父さん航空隊にいかなあかんで」と大声で言っている。

航空隊では非常招集により、すでに飛行点検の作業が始まっていた。そして、すぐに京都市内の被害状況偵察が下命され、阪神・淡路大震災の飛行活動が始まった。

京都市内については、上空から見る限り穏やかな冬の朝で薄雲がたなびき、何ら異状は見受けられなかった。また、偵察途中、震度3の余震が発生したにもかかわらず、ヘリコプターの飛行は何もなかったかのように安定していた。内心、「震度5でもたいしたことない。京都は大丈夫なのや」と思っていた。

そんな京都市内の様子とは裏腹に、神戸方面の空には黒煙が上昇しているのが認められた。そして、地上から神戸へ救助隊を送り込むべく、道路の状況把握のため国道171号、名神高速道路の偵察を行った。

名神高速道路には車は1台も通行していないが、国道は通常どおりだった。ただ、茨木市付近から神戸方面行きの車線は、大渋滞になっていて、地上から消防隊を送り込むとすれば、何時間かかるか想像もつかない。千里から大阪空港の管制圏に入るべく許可をもらおうと交信するが、空港はパニック状態で、追い討ちをかけるように、新聞社、テレビ局、警察関係のヘリが交信し、15分ぐらい待たされる。

千里からも神戸市で火災が発生しているのが、黒煙の上昇ではっきりとわかった。それも1カ所や2カ所ではなく、10カ所ぐらいで、更に1カ所の燃焼規模が経験したこともない程の大きな面積である。

尼崎、西宮、芦屋と飛行するうちに、

高速道路の倒壊、鉄道線路の寸断、家屋の倒壊や火災と、地震災害の全貌が確認できるようになってきた。ただ、いつもと違うのが、このような大災害の場合、地上の消防隊の無線通信が飛び交うのが通例なのが、全国波にしろ、府県波にしろ、全く交信されておらず、大阪空港の管制官のヘリの注意を促す航空無線のみがレシーバーから聞こえてくるということであった。

自分の機体の下には、黒煙の火災現場があり、消防隊の姿も見えず、燃えるに任す災害現場があるだけだった。

この日の午後から、人員空輸と物資空輸が始まった。翌日には各消防、防災航空隊のヘリも全国から続々と集まってきた。神戸市消防ヘリポートは、さながらヘリの展示場のようである。北は札幌、南は北九州まで、機種もドーファン、BK117、大型のスーパーピューマまで様々である。更に海上保安庁、民間航空会社の無料のヘリ提供と、多数の機体が飛行する。

各航空隊ごとに役割を定め、救急担当、物資担当を交互に行うことになった。常に、どこかの航空隊3隊が飛行している編成である。報道のヘリがここに割り込むかたちとなり、右1機、左2機、下1機と、見張りの徹底を乗組員全員で行わないと、ヘリの空中衝突を起こす危険性があった。

我々も京都消防ヘリポートからの消防、救助、救急隊員の人員空輸をはじめ、神戸市の物資、救急患者搬送を行うことになった。地上では、ものの2㎞の距離が3時間以上かかるらしく、ヘリでの搬送がたいへん役に立つ。京都で言えば、二条城の前から平安神宮前のグランドまでの距離ぐらいである。

物資空輸で着陸すれば、直ちにボランティアの30名がヘリからトラックまで列を作り、ダンボール箱を手渡しで次々と運んでくれる。それも、次から次とヘリが着陸するたびにである。

小学校のグランドも避難場所となり、テントや車が多数占めるようになり、昨日着陸できたのが、今日はもう着陸できなくなっていたりした。

狭いひび割れた学校のグランドからの救急搬送。航空局、空港事務所の基準も何も言っていられない。今、ここで着陸して、救急車からの患者を大阪、姫路の病院に空輸することが、第一のやるべき任務なのだ。人命救助は消防の任務であり、震災だからこそやらねばならない搬送である。

今回の震災においては、陸上の消防活動以上に航空消防の重要性がとりざたされた。今後は、今回の活動の経験をもとに、より高度な技術を身につけ、京都市のみならず、日本の防災に尽力したいと考えている。

瓦礫の中での救助活動

伏見消防署醍醐消防分署　齊藤義治

地震発生当日、京都市消防局のヘリコプターに救助資器材を積込み、出発した。

ヘリポートを離陸して約10分、大阪市の上空で神戸方面が黒煙に覆われ、大阪上空までその煙が漂っているのが見えた。更に、六甲山を越えて神戸市の上空に入ると、市内の至る所で火の手が上がり、黒煙が巨大な入道雲のように神戸の市街地を包み込んでいた。

神戸市北区にある兵庫県消防学校に着陸後、大渋滞の車をかき分けながら長田消防署を経由して、やっとのことで神戸市立西市民病院に到着した。この病院の倒壊状況は、旧館の5階の病棟中央部付近から西側が完全に上階に押し潰された状態で、あまりの惨状に愕然となった。

病院内では神戸市消防局の救助隊と兵庫県警察機動隊により、すでに救助活動が開始されていた。しかし、未だ10数名の入院患者の方々が救助を求めていた。

我々が担当した東側は進入ルートが狭く、ほふく前進してようやく通れる程度の隙間しかなかった。我々の活動内容は、この隙間を30m進み、さらに壁体を破壊して病室に進入し、要救助者を救出するというものだった。大型の救助資器材を搬入できないので、油圧式カッター、フットポンプ、鉄線鋏などを携行して病室間の壁を破壊し、ベッドの鉄製パイプや、落下している吊り天井の金属部分を切断し、更に石膏ボードを剝がして少しずつではあるが、着実に前進していった。狭く、瓦礫の中での活動では、約30分ごとに発生する余震が我々を震え上がらせ、思わず活動の手を止めた。

そのような中で我々の使命感を駆り立てたのは、暗く狭い瓦礫の中で数時間も閉じ込められている入院患者さんたちの声で、壁越しに小さくとも確実に聞こえてくる。「みんな生きてるで、ベッドの隙間に落ちて動けへんのや」というその声に対し、「頑張りや、すぐに助けてあげるさかい」と、励ましつつ前進を続けた。

その結果、2病室から生存者6名を、さらに桑名市消防本部救助隊と共同で2名を、計8名の生存者を兵庫県警察機動隊の協力も得て、救出することができた。

暗く狭く、しかも粉塵にまみれた瓦礫の中で、連続5時間に及ぶ救助活動であったが、救出した患者さんや病院関係者からの温かい感謝の言葉を胸に現場を離れた。

昼夜に及ぶ消火活動

下京消防署　塚本　勉

1月17日朝、神戸に応援出動するため、各署から派遣される小隊が南消防署に集結し、京都消防の部隊が編成された。神戸までの道程では、私の隊が先導を務めるように命じられ、その責任の大きさに身の引き締まる思いであった。

各車両がサイレンを鳴らし、名神高速道路を一路神戸へと向かった。途中、吹田ICでは料金所が全壊しており、そこからは道路状況も悪くなり、所々で亀裂が生じ、段差があるところもあった。

尼崎ICで通行止となったため、名神高速道路を降りて国道2号線へ出た。しかし、そこには多くの車が溢れており、上下線とも身動きのできない状態であった。

「一刻も早く神戸に行かなければならない」。サイレンとマイクをフルに使い、西へと進もうとするが思うようにいかない。私は下車して、前の1台1台に移動してもらうが、大型車両が多く、うまくいかない。

どのくらいの時間がかかっただろう。ようやく国道43号線に出る。43号線は道幅が広く走りやすかったが、道路には至るところに亀裂が生じており、ガス臭もしてきた。途中、かなり大きな段差に行く手を遮られたが、付近の住民が角材等を利用して消防車両の進行を助けてくれた。

しばらく進むと、阪神高速道路の倒壊現場に差し掛かった。我と我が目を疑う。言葉が出ない。「冷静になれ」と自分に言い聞かせる。たまたま居合わせた白バイ隊員に先導を依頼し、更に状態の悪くなった道路を進む。

進むにつれ倒壊家屋が多くなり、所々で黒煙が見られた。神戸市に入るが、そこは私が知っている神戸とは様子が違っていた。ビルが倒れ、家屋が潰れていた。そして、そのような状況にもかかわらず、車は溢れ、なんら交通規制はされていなかったのである。

午後2時30分、神戸市役所に到着。市役所2号館の一部が押し潰されており、職員が「あの中に何人かの職員がいるのはわかっているのですが…」と無念そうな表情を見せる。「私たちが…」と言おうとしたその前に、「京都消防さんは長田区の現場に行ってください」と言われ、心を残しながらも長田区の現場へと向かった。

長田区方面の空は薄暗く、大量の黒煙が風に流され、視界全部が煤けていた。

午後2時55分、長田消防署に到着。署の横を流れる川の対岸は、黒煙をもうもうと吹き上げ炎上している。早速、各隊の活動内容を聞き、京都消防の活動を検討する。海水を水源とし、どこの隊も活動していない場所で活動することを決定し、直ちに現場に出動した。

午後3時30分、長田港に到着。地元の漁師さんの協力を得て水源を確保、ホース延長を開始した。

各隊のホース間隔を均等にするため、間隔は20本と決める。このため通常の中継体形とは逆のやり方で、先にホースを延長し、消防車を後から配備する方法を取った。

火災の最前線は、被災者の避難場所である小学校まで約30mと迫っていた。早く防御しなければならない。中継体形完了後、すぐ「放水始め」の無線を発信する。しかし、距離が長いため、なかなか水が来ない。やっと水が来ても、圧力が上がらず、思うように放水量が得られない。複道2線による中継体形を確保するため、地元消防団の協力を得て、再度ホースを延長する。

道路を挟んで両側が燃えている中での防御活動のため、炎上している家屋が隊員の目の前に崩れてきたり、突然背面の建物が炎上したりと、非常に危険な活動であったが、全員で協力し、防御線を死守した。

約4時間の放水により、火勢はようやく下火となり、午後8時には第2現場へと転戦した。

他の消防本部との無線周波数や使用ホースの違い等、活動には様々な障害があったが、他にも大きな問題があった。幹線道路にホースを延長しているため、一般車両がホースを引っ掛け、そのたびに放水を中断し、ホースを交換しなければならないことであった。この作業を何回繰り返したことであろうか。

明朝、まだ活動を続けていた私たちに、「ご苦労さまです」と言って、被災者の方たちがおにぎりを配ってくださった。「この人たちのためにも頑張らねば…」と、胸に込み上げるものがあった。

18日午前11時、交替の消防隊が到着。申し送りを完了し、現場を離れた。そして、京都に帰署したとき、署長以下全署員が出迎えてくださったことは忘れられない。

私は、この災害出動で多くのことを学んだ。この経験をできるだけ多くの人たちに伝えていきたいと思う。

二度とこのような災害がないことを願う。そしてこの災害で、家族を、住居を、また職場を失った方々が、一日も早く元の生活に戻られることを、心からお祈りするものである。

神戸での救急活動

伏見消防署　奥村剛史

神戸市立西市民病院の5階が崩壊したため、救助隊が閉じ込められた入院患者を救出している。京都市救急隊2個小隊は救出された患者を他の病院に搬送すべく、病院駐車場に待機していた。救急隊の前では、病院の救急車やワゴン車等の患者搬送用車両が次々と到着して、患者を他の病院へ転送して行く。我々から見れば救助事故現場であるこの病院も、市民から見れば重要な医療機関であり、患者が続々と押し寄せて来る。医師や看護婦はそれらの患者に必死で対応していた。

しばらくして、病院から患者の転院に救急車を使用させて欲しい旨の要請が寄せられた。そこで、救急隊2個小隊が交代で転院搬送することを病院に伝達すると、病院側はすぐに重傷者2名を当隊に収容した。行先は須磨区のT病院である。

道案内として病院職員に同乗してもらい、「さて出発」と思ったところ、他に2台の車両がT病院に向うので緊急車として先導して欲しい、との申し出があった。驚いてさらに聞くと、2台のワゴン車に患者をそれぞれ3名ずつ収容して準備している。それらの車両は役所の車で運転者は市職員、T病院の所在地を知っている者は乗車していないとの説明だった。

T病院に向う途中、同乗の病院職員が救急車の車高を知らないため、高さの足りないJRのガード下を通過しようとしたり、通行する道路に電柱が倒れていたりで、その対応に苦労した。更に、全市で停電していたため、道路信号はすべて消えており、主要交差点は警察官が交通整理をしているものの、その他の交差点は走行上危険なこと甚だしかった。

当隊は、この患者搬送の他にも3件出動したが、その中には遺体搬送もあった。看護婦は救急隊の運用方法を知っているだけに「搬送してもらえるか」と相談されたが、何でもやる気であったので承諾した。しかし、搬送したローソクの明りだけのM高校体育館で、整然と並べられた数十体の遺体を前にしたときには、言葉が出なかった。また、ポートアイランドにあるK病院に向かった際は、液状化現象のため泥濘と化した道路を走行した。

この大災害を前にした救急隊員として、十分な活動を実施できたのかと考えたとき、もっとできることがあったのでは…とも思うが、最善は尽した。しかし、今はそれ以上に5500名余りの死者に対して冥福を祈るとともに、この大災害からの復旧と復興を祈るのみである。

焼け跡を調査して

予防部予防課　林沼　修

兵庫県南部地震が発生し、続々と悲惨なニュースが報道されるなか、地震発生から10日目の1月27日に「火災調査応援」の派遣命令を受け、局長申告もそこそこに、29日神戸市に向けて出発した。

名神高速道路を一路西へと進み、尼崎に入ると屋根瓦のずり落ちた家屋や青い防水シートで屋根を覆っている家屋が目につくようになったが、西宮から芦屋にさしかかると通りに面する木造家屋のほとんどが倒壊し、哀れな残骸をさらしており、まさに悪魔の爪痕と形容するしかないほど悲惨極まりない情景であった。

いよいよ神戸市に入ると、火炎地獄とも言うべき焼け跡が延々と続き、何とか火災の難を逃れた木造家屋やビルまでもがすべて倒壊し、その悲惨さは筆舌に尽くしがたいほどで、被災者の悲しみや哀れさがひしひしと伝わってきた。

今回の火災調査応援は、り災証明書の発行事務に係る被害調査が主な業務であり、神戸消防の方々と一緒に焼け止まり線を歩き、半焼、全焼の確認を行うとともに、併せて付近住民の聞き込み調査を実施したところである。

調査現場に赴き、広大な焼け跡を眼前にすると、改めて災害のすさまじさで身のすくむ思いがした。飴のように曲がり焼け爛れた鉄骨、茶褐色に崩れ落ちたビル、灰土と化した焼け跡がどこまでも続くそのところどころに、ひっそりと手向けられた花を見るとき、亡くなられた人に対する残された家族の悲しみが身にしみ、いたたまれない気持ちになった。

それでも、調査に当てられた4日間、広大な焼失面積を把握すべく歩いて歩いて歩き続け、周辺の方々に聞き込みして、何とか調査結果報告書を作り上げた。

最後にこの調査期間中、神戸消防の方に聞いた驚嘆すべき話を皆さんにお知らせして、筆を置きたいと思う。

「私の先輩なんですが、お母さんと娘をこの地震で亡くされたにもかかわらず、その日から出勤して活動をされ、5日目にやっと帰られたんですが、その間そのことを一言も我々に漏らされませんでした」

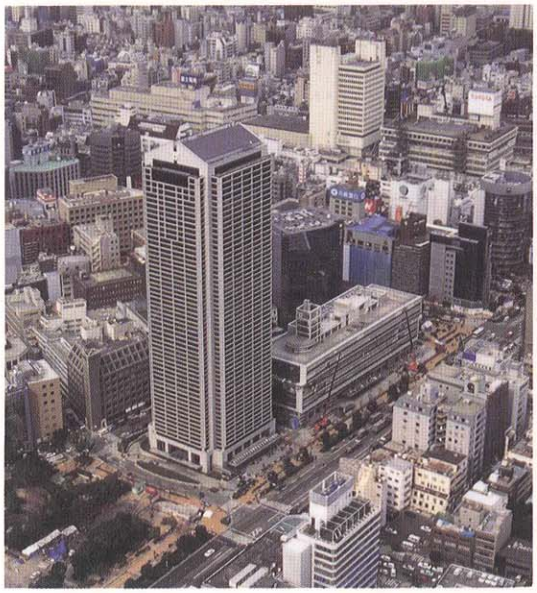
この話を聞いたとき、彼の強い意思を感じるとともに、自分ならどうだろうかと自問したが、本音のところ、とても真似ができるとは思えなかった。

京都消防
阪神・淡路大震災特集号

平成7年3月30日印刷
発行　「京都消防」編集委員会
京都市伏見区深草越後屋敷町61
京都市消防学校内
（〇七五）六四一―二三七六

写真提供　神戸市消防局「雪」編集部

印刷　日本写真印刷株式会社



神戸大学人社系図
02000097409